

## 論文

### 神殿における儀礼と廃棄 —中央アンデス形成期の事例から—

松本 雄一

#### 要旨

本論では、中央アンデス形成期（紀元前 3000-50 年）の神殿において行われた儀礼行為を考察する。その際に、儀礼後に形成された廃棄コンテクストに焦点を当て、理論的枠組みとして行動考古学と実践理論の接合を試みる。特に、近年のウィリアム・ウォーカーの廃棄行為に関する研究を援用し、神殿の廃棄コンテクストの生成過程に焦点を当てる。形成期神殿における廃棄コンテクストにおいては、儀礼に用いられた土器や道具が饗宴後の食べ残しなどと共に出土する。出土遺物の包括的な分析を行い、廃棄されたモノのライフヒストリーをたどることで、一度神殿での儀礼で用いられたものが日常的な脈絡に戻る事が不可能であること、その結果として儀礼的廃棄と呼ばれる特殊な廃棄コンテクストが出現したことが示唆される。また、実践理論を援用してデータの解釈を行うことで、繰り返される儀礼から廃棄への過程が、人間集団と神殿そして神殿での儀礼を関連付け、その記憶を維持するメカニズムとなっていた可能性を指摘する。

#### キーワード

アンデス形成期、行動考古学、実践理論、儀礼、廃棄行為

#### 1. はじめに

本論は、中央アンデスの形成期（紀元前 3000-50 年）と呼ばれる時代における儀礼と廃棄行為に関して考察することを目的とする（図 1）。この時期には、高地と海岸部の双方で神殿が建造されて社会が複雑化し、文明と見なすことができるような社会が出現したと考えられている（e.g., Burger 1992; 加藤・関編 1998; 大貫・加藤・関編 2010）。

加藤泰建が指摘した通り、この時代を特徴付けているのは、神殿を中心として社会が組織化されていた点にあるとよい（加藤 1998: 38）。この場合の神殿とは、ヘレイン・シルバーマンが定義したように、「宗教的な信仰に基づく祭祀・儀礼行為が行われる場」（Silverman 1994: 1）であり、本論では、記念碑的、公共的な性格を持つ建築に限定する。その規模と凝らされた装飾は、建築活動に費やされた労働力と結び付けられ、社会の複雑化を考察する基準とされることが多かった（e.g., Haas and Creamer 2006; Pozorski and Pozorski 1987）。しかしこの視点においては、労働力として換算することが困難な儀礼行為

の実態とその意味は無視されてしまう傾向にある。そこで本論では、神殿と社会発展という脈絡から離れ、儀礼行為自体に焦点を当ててみたい。そのために、従来の研究であまり注目されてこなかった「儀礼後の廃棄コンテクスト」に注目し、行動考古学および実践理論を理論的枠組みとして用いて、儀礼行為の実践がどのようなものであったかを考察する。

## 2. 儀礼と廃棄行為

この節では、本論の学史的な背景を論じ、理論的な枠組みの構築を行う。最初に儀礼に関する考古学的アプローチを概観し、その後本論の理論的支柱となる行動考古学と実践理論が、儀礼行為を考察するうえでどのように関わり得るかを述べる。

### 2-1. 儀礼に関する考古学的アプローチ

イギリスの考古学者クリストファー・ホークスは、1954年に発表した「考古学の理論と方法：旧世界からのいくつかの示唆」(Hawkes 1954)において4段階からなる推論の階梯を提示した。これによれば、考古学の扱う領域は技術、経済、社会政治組織、宗教と精神世界に区分され、文字資料や口頭伝承などの補助がない場合、考古学にとって最も扱いやすいものは技術とされる。さらに経済、社会政治組織の順で考察が困難となってゆき、宗教と精神世界は考古学において最も困難なテーマであると位置づけられた(Hawks 1954: 162)。その後彼の論は「ホークスの梯子」の名で知られるようになり、広く議論を呼ぶこととなった(e.g., Trigger 2007: 306-307)。その後1960年代以降のプロセス考古学の潮流の中で文化生態学と結びついた生業体系の研究、新進化主義に基づく複雑社会論が主要な研究テーマとなるに至って、宗教を考古学が扱うことは困難であるという認識は一層強まった(e.g., Yoffee 2005)。しかし1980年代以降、ポストプロセス考古学によるプロセス考古学批判と時期を同じくして、宗教、信仰およびそれらにかかわる事象が考古学における重要な研究課題として回帰し、現在は多様なアプローチが試みられている(e.g., Renfrew 1985, 1994; Bradley 2005; Fogelin 2007)。このような脈絡において、宗教を扱う考古学者は儀礼行為に注目することが多かった。ラース・フォージェリンが指摘するように、宗教が抽象的な象徴システムである一方で、儀礼は人間の行為の一つであり物質的な痕跡を残すので、考古学的にアプローチしやすいとみなされるためである(Fogelin 2007: 56)。

宗教と儀礼がどのような関係にあったかは考古学、人類学において古くからの問題であり、多様な視点が提示されている。ここでは、近年の儀礼に関する考古学を総括したフォージェリンの論(Fogelin 2007)を紹介し、現在の動向を概観しておきたい。彼は、考古学者が儀礼を扱う際の傾向を二つに区分している。一つが宗教を主とし儀礼を従ととらえる考え方であり、もう一つは逆に儀礼を主とする見方である。

前者において宗教は「安定して永続する文化現象」(Fogelin 2007: 57)であり、構造主義的な概念とみなされる。この場合、儀礼行為は宗教の実演として定義されるため、儀礼もまた比較的長期にわたって大きな変化を経験しないことになる。このような視点は民族誌、歴史資料の考古学への援用を考えたときに都合がよい。歴史的な変化と断絶を想定しないため、これらの資料を読み解くことで得られる豊かな情報を解釈に用いることが正当

化され、ホークス (Hawks 1954) の論じた考古資料の限界を越えて宗教にアプローチすることが可能となるためである。後者はこれとは正反対のアプローチであり、「儀礼は宗教的信仰の安定した舞台を保護し、演ずるものではなく、むしろ儀礼が宗教的信仰を構成し、創造し、改変する」(Fogelin 2007: 58) という立場をとる。このような立場は実践理論を理論的基盤としており、近年多くの研究者に受け入れられている (e.g., Bell 1997; Dobres and Robb (eds.) 2000; Meskell 2002; Pauketat 2001; Van Dyke and Alcock (eds.) 2003)。この場合の実践理論は、ピエール・ブルデューやアンソニー・ギデンズなど、主にヨーロッパの社会学者によって提唱されたものであり、行為主体 (agent) と構造 (structure) を分析概念とし、両者間の弁証法的関係を考察の対象とする (e.g., Bourdieu 1977; Giddens 1979)。ごく簡潔に述べるならば、実践理論において行為主体は社会を構成する個であり、よりマクロな社会関係としての構造によってその実践は制限される。その一方で、構造は行為主体の実践を制限はできても決定はできず、したがって行為主体の実践によって構造自体もまた変化することになる。この場合、宗教を主とする立場とは大きく異なり、個別の脈絡における儀礼の象徴的意味はそれほど重視されない。むしろ、人々が儀礼の実践を通じて宗教的信仰を変革する行為に焦点が当てられる。

## 2-2. 行動考古学

行動考古学 (Behavioral Archaeology) が考古学の一分野として確立されたのは、1975年に Behavioral Archaeology : Four Strategies (行動考古学 : 4つの戦略) と題された5ページほどの論文 (Reid et al. 1975) が American Anthropologist に発表されたときであるといっていよう。ちょうどその頃北米考古学において、ニューアーケオロジー、あるいはプロセス考古学の潮流がその円熟期にあった。この論文の中でジェファーソン・レイド、マイケル・シファー、ウィリアム・ラスジェという3人のアリゾナ大学の考古学者は、「考古学は人間行動と物質文化の関係性の研究として定義できる」(Reid et al. 1975: 864) とし、行動考古学を「人間行動を説明し記述するための、時間と空間を限定しないモノの研究」(Reid et al. 1975: 864) と定義した。その結果行動考古学は、現代の物質文化をも射程に収めたユニークな研究を生み出すこととなったのである (e.g., Gould and Schiffer (eds.) 1981; Rathje 1974, 1978; Schiffer 1991, 1994)。特に、シファー達による考古学的資料の生成過程、遺跡形成論の研究は広く考古学者に影響を与え、70年代後半から80年代にかけての主要な研究テーマの一つとなった (Moore and Keene (eds.) 1983)。しかし皮肉なことに、遺跡形成論が重要視され、その中範囲理論の構築における有用性が認識された結果、「行動考古学はプロセス考古学の論理実証主義に連なるものであり、また主として考古資料の形成過程を論じる分野である」、と一般に認識されることとなった (e.g., Walker et al. 1995)。そのため行動考古学は、1980年代以降プロセス考古学とポストプロセス考古学が混雑し、また各々が変化していく中で、双方から激しい批判を浴びることとなった (e.g., Earle and Preucel 1987; Flannery 1982; Hodder 1991)。

ただし実際には、上記の批判の対象となったような「遺跡、遺構の形成プロセスを復元し、考古資料の科学主義的な解釈のための中範囲理論を構築する」というようなステレオタイプ・イメージとしての、唯一の行動考古学というものには存在しない (Walker et al. 1995:

1)。特に1990年代以降、ポストプロセス考古学が北米の研究者に対しても影響を強めるようになるにつれ、遺跡形成過程を論じるためのモデル構築という枠を超えた多様な研究が生まれている。近年特に重要となっているのが、エージェンシー、ジェンダー、記憶などのテーマを、遺物に残された行動の痕跡から読み取ろうとする試みであり (e.g., Mills and Walker (eds.) 2008; Skibo et al. (eds.) 1995; Walker and Lucero 2000)、このような場合「行動 (behavior)」の語それ自体も、人の身体動作を超えて、人間の活動に関わるモノ (道具など) を内包する概念として再定義されることになる (Walker et al. 1995: 5)。

### 2-3. 行動考古学による儀礼行為へのアプローチ

このように多様化した行動考古学の中で、近年は儀礼行為に関する研究が活発に行われるようになってきている (Fogelin 2007: 61-62)。筆者はその中の、ウィリアム・ウォーカーによる廃棄跡の分析を通じた儀礼行為の研究 (Walker 1995a, 1995b, 1998, 2002) に注目したい。現在ニューメキシコ州立大学の准教授であるウォーカーは、アリゾナ大学においてシファーの下で学び、1995年に博士号を取得している。いわば、アリゾナ学派における第2世代に当たり、ポストプロセス考古学の問題意識をも取り込んだ独自の研究を展開している (e.g., Walker 1998, 2002, 2008; Walker and Lucero 2000)。

彼は、これまでの儀礼に対する考古学的アプローチが、その本質と見なされる宗教の象徴的側面に集中し、行為として儀礼の重要性を無視してきたという批判を展開し、儀礼行為を分析するための行動論的な枠組みの必要性を主張する (Walker 1995b)。また、従来の枠組みにおいては、奉納供物 (votive offering) が儀礼の考古学的痕跡として過度に重視されてきたと論じている。ウォーカーによれば、このような視点に立つと、本来儀礼行為に使用されたはずのモノを、象徴的な分析にのみ供される静態的な非実用の (non-utilitarian) モノへと還元してしまうこととなり、モノの使用を含む、人間行動としての儀礼の側面を覆い隠してしまうこととなる (Walker 1995b: 67)。そこで彼は、行動考古学においてその初期から重視されてきたモノの「ライフヒストリー」という視点 (e.g., Schiffer 1972)、すなわち「モノがどのように製作、使用され最終的に考古学的コンテクストとして調査者の前に現れたか」、に立ち返ることが重要であると主張する (Walker 1995a, 1995b, 1998)。この視点においては、儀礼的なモノを単純に実用/非実用 (utilitarian/non-utilitarian) に区分するような、二元論的かつ静態的な機能と価値の体系を論の前提とすることは不適切であり、モノが製作され最終的な廃棄に至るまでの一連の出来事を動的にとらえることが重要とされる。

この点でウォーカーは、人類学者イゴール・コピトフが交換と価値を論じる際に用いた単一化 (singularization) という概念 (Kopytoff 1986) を論の基盤とする。コピトフによればヒトを含む全てのモノのライフヒストリーは、交換を含む社会的相互作用の連続性の中に位置づけることが可能である。つまり、社会的相互作用が時間と共に進行し、それと共にモノの属性と意味も変化する。彼はこのような変化を説明するために理念的な二つの極を設定した。一方の極が自由な移動と等価交換が可能な日用品 (commodities) であり、もう一方が完全に交換不可能な単一物 (singularities) である。さらにこの両極は連続的であり、現実の社会に存在するものはこの両極のどこかに位置づけられ、その位置は社会的

相互作用の中で変化し得ると定義した。この場合、例えば「日用品がある特定の脈絡において単一化の方向へと向かい、儀礼的なモノとして再定義される」、というような動態も含まれる。ウォーカーの考えでは、通文化的に見たときに、儀礼に使用されるモノは特有のコントロールされたライフヒストリーをたどり、後者の極に近づくことになる (Walker 1995b: 72)。

このような分析を可能にする枠組みとして、ウォーカーは儀礼行為に対応する三種類の廃棄コンテクストの類型を想定する。以下にその概要を示しておく (Walker 1995a: 97-98, 1995b: 76-77)。

(1) クラトファノス 廃棄 (Kratophanous deposit) は、モノが異なる宗教、あるいは儀礼伝統の中で単一化し危険である場合に、そのモノ (ヒトを含む) を (現実的な意味であれ象徴的な意味であれ) 殺すという行為が発生し、その結果として考古学的なコンテクストが出現する場合である。例として、新世界におけるカトリックの布教が、在地の競合する儀礼の専門家を殺すのみならず、儀礼用具、偶像、建物をも焼き払った際の状況などがあげられる。

(2) 犠牲的廃棄 (Sacrificial deposit) は、その時点で引き続き使用可能、あるいは生存可能なモノを各々の脈絡から引き離し、直接的に考古学的なコンテクストに変換する行為として定義される。この場合、本来使用可能だった残りの期間が、概念的に儀礼の脈絡で生かされることになる。奉納供物、埋納遺構などがこれに対応する。

(3) 儀礼的廃棄 (Ceremonial trash deposit) は、超自然的な、あるいは宗教的な力を充填されたモノが、その本来の役割を果たさないようになった後、特定の廃棄の手続きが必要とされるようになる状態で現れる。この場合、その本来の機能が停止していたとしても、廃棄の対象となるモノは力を有しており、日常のコンテクストに戻すことが危険であったり、聖性を汚すことになったりすると考えられるためである。使い古された儀礼具の廃棄、儀礼的な饗宴が行われた後の廃棄などがこれに対応している。

特にウォーカーは(1)~(3)の中で、(3)儀礼的廃棄をもっとも基礎的な概念であると捉えており (Walker 1995a: 100)、実際に(1)、(2)は広い意味で(3)に内包されるような印象を受ける。イアン・マクニブンが指摘しているように、この3区分は儀礼化された廃棄慣習を概念化し、同定するための重要なヒューリスティックデバイスであるが、実際の考古学的コンテクストにおいてはこの3区分の境界はぼやける (McNiven 2012: 8)。よって、本論で扱うアンデス形成期神殿の事例においても、この区分を杓子定規に用いて廃棄コンテクストの類型化を行うのではなく、緩やかに運用して考察の枠組みとしたい。

このようなウォーカーの廃棄行為に対するアプローチが従来の視点と異なるのは、分類の基準が遺構の形態ではなく、人間行動とモノの関わり、特にモノのライフヒストリーをもとになされている点である。つまり、従来漠然と「儀礼的」と捉えられてきたコンテクストの生成過程に対する関心を促し、饗宴・パフォーマンスなどの行為自体のみならず、モノの使用から廃棄に至る一連の過程に注目し、より包括的に儀礼行為を論じている。また先にも述べたように、このような行動論的な枠組みを設定することによって、儀礼行為

を宗教における象徴的な側面とは異なる角度から考察することができる。したがって、儀礼的廃棄の概念では、儀礼に伴うモノであれば、それ自体が直接儀礼に関係するモノ（祭具など）でなくとも考察の対象となり得る。また、このようなアプローチは、近年の実践理論に基礎を置く物質文化、あるいはマテリアリティの議論とも重なる部分が多く、人とモノの双方のエージェンシーがそれぞれのライフヒストリーを通じてどのように関わりあうかという問題は、考古学と人類学の両方において重要なテーマとなっている（e.g., Gell 1998; Meskell (ed.) 2005; Miller (ed.) 2005; Mills and Walker (eds.) 2008）。

#### 2-4. 実践理論と行動考古学

次に筆者は、上記のウォーカーの議論に実践理論的な視座を導入することを試みる。まずここで近年の考古学における実践理論に関して学史を概観し、あわせてそれと行動考古学との関係を論じておきたい。イアン・ホダーは、1980年代にそれまでの様式及び機能的分析を中心とした物質文化研究を批判し、物質文化を「意味深く構成された (meaningfully structured)」テキスト (Hodder 1982, 1986) として読み解くという解釈考古学的アプローチを提唱した。この点を社会学者アンソニー・ギデنز、ピエール・ブルデューらの実践理論 (Bourdieu 1977; Giddens 1979) を用いて整理したのがマイケル・シャンクスとクリストファー・ティリーであり、その代表的な著書「考古学を再構成する (Re-constructing Archaeology)」(Shanks and Tilley 1992) において物質文化を「構造化され、構造化する記号システム (structured and structuring sign system)」とし、それによって「物質文化はエージェンシーによって構造化され、一度労働が物質化されると、今度はそれが実践を構造化する」(Shanks and Tilley 1992: 131-133) と述べている。このような物質文化を動態として捉える視点は、ポストプロセス考古学の論理的支柱の一つである、歴史性すなわち通時的な視点を重視することとも合致している。代表的な提唱者として挙げられる、近年実践理論を組み込んだ複雑社会論を展開しているティモシー・ポコタット (e.g., Pauketat 2001, 2007) によれば、実践理論の基盤となるのは「人々の行為とその表現すなわち“実践”とは生成的なものであり、同時に歴史的過程である」という認識であるという (Pauketat 2001: 74)。このような理論的枠組みを行動考古学におけるモノのライフヒストリー、特にウォーカーがその下地とした単一化という視点から見ると、モノが単一化される過程の実践がよりマクロな社会構造の変化、維持、そして再生産と関わる歴史的過程を考察する、という物質文化研究の新たな主題が浮かび上がってくる。換言すれば、「モノの価値のあり方が社会的相互作用の中で時と共に変化する」というコピトフの議論を、「モノに関わる人々の実践とそれによって構造化される社会」という実践理論の視点によって捉えなおす試みである。本論では、この視点を中央アンデス形成期の事例を通じて展開したい。

以上のような理論的背景に基づき、次に形成期の神殿にみられるいくつかの廃棄コンテキストを儀礼行為との関わりで考察する。

### 3. 形成期神殿と儀礼に関する研究の現状

本節では中央アンデス形成期の神殿について概略し、神殿における儀礼行為に関する研

究の現状を概観する。

南米中央アンデス地帯において「形成期」と呼ばれる時代は、紀元前3000年に海岸部において神殿が作られ始めた時期に始まった(関 2010)。本論では、神殿、あるいは公共的祭祀建築、civic/ceremonial center、monumental architecture を、「祭祀・儀礼」が行われた場所として定義する(e.g., Moore 1996; Silverman 1994)。神殿において祭祀・儀礼がおこなわれたと想定されるのは、基壇や広場によって構成されるその建築が、明らかに住居という機能を越えた規模、構造、そして装飾を有しているためである。また神殿および神殿内の埋葬から、多くの祭祀に関係した遺物が出土している点もこの想定を支持している(e.g., Burger and Salazar-Burger 1998; Kato 1993; Matsumoto 2012; Onuki 1997; Onuki and Inokuchi 2011; Seki et al. 2010)。このような神殿の建築および維持に必要な労働力は一世帯の日常生活のレベルをはるかに超えていたと考えられるため、複数の家族複合から一つの地域社会全体に至る様々なレベルで社会組織の複雑化が進行していたと考えられている。

近年では、海岸部と山地の双方で大規模な神殿の調査が進展し、基礎データの蓄積が進み、儀礼行為に焦点を当てた研究も十分ではないが増加傾向にある(e.g., Burger 1992; Moore 1996; Rick 2006, 2008)。また、儀礼後の廃棄コンテクストの研究も少数だがある(e.g., Burger and Salazar Burger 1998; Ikehara and Shibata 2008)。ただし、いずれの場合においても、儀礼行為それ自体ではなく、社会変化、あるいは社会進化のなかで儀礼の果たした役割に焦点が当てられている。この種のアプローチが社会変化を考察するために重要であることは疑いないが、儀礼そして儀礼後の廃棄コンテクストにおける「生成、進行中のマテリアリティ、そしてエージェンシー(on-going materiality and agency)」を無視しているという批判(McNiven 2012: 4)は免れえない。

このような先行研究を踏まえたうえで本論では、前節で述べた行動考古学的視点、特にウォーカーによる儀礼後の廃棄コンテクストの類型(Walker 1995a, b)、モノのライフヒストリー(Kopytoff 1986; Schiffer 1972; Walker 1995b)という視点、そして近年考古学において盛んに用いられている実践理論(e.g., Bourdieu 1977; Dornan 2002; Dobres and Robb (eds.) 2000; Giddens 1979)を併用し、アンデス形成期の神殿における儀礼から廃棄に至る過程を考察してみたい。付け加えておくと、筆者はこの視点を従来のアンデスにおける儀礼研究を批判するために用いるわけではない。行動考古学の枠組みも実践理論もあくまで分析のツールであり、従来とは異なる視点からデータを考察するためのものである。筆者は、このようなアプローチは、儀礼の考古学的研究において大きな成果を上げてきた図像分析(e.g., 井口 2001; Roe 2008)や認知考古学(e.g., Flannery and Marcus 1993; Renfrew and Zubrow (eds.) 1994)を補完するものと考えている。

#### 4. 個別事例

この節では廃棄コンテクストを個別に記述する。本論の目的は形成期神殿における廃棄コンテクストを網羅的に記述することではないため、筆者が実際に調査にかかわった「儀礼→廃棄」の流れがある程度特定可能な四つの事例を検討し、他の事例については次節で

包括的な考察を加える際に併せて論じることとする。

#### 4-1. カンパナユック・ルミ遺跡における廃棄コンテクスト

カンパナユック・ルミは、ペルー共和国アヤクーチョ県、標高 3600m の高地に位置する神殿遺跡である (図 1)。2007 年から 2008 年にかけて、筆者はユリ・カベロ・パロミーノと共に同遺跡の発掘調査を行った。発掘調査の詳細は別稿で論じているため (Matsumoto 2010a; Matsumoto and Cavero 2010) ここでは割愛し、概略を述べるにとどめておく。

層位的な発掘と 31 点の絶対年代資料により、カンパナユック・ルミは紀元前 1000 年ごろから紀元前 500 年ごろにかけて神殿として機能し、その編年は建築と土器様式の変化から 2 時期に区分できることが判明した。形成期中期に対応するカンパナユック 1 期 (形成期中期/紀元前 1000-700 年) においては、600 km 北に位置する同時期の大神殿であるチャビン・デ・ワンタルと類似した大規模な神殿建築が、比較的短期間に大量の労働力がつぎ込まれ造られた (図 2) (Matsumoto 2010a; Matsumoto and Cavero 2010)。続くカンパナユック 2 期 (形成期後期/紀元前 700-500 年) には建築が拡大し、遺物の様式においてもチャビン・デ・ワンタルの影響がより強くなったことがうかがえる。本論の主題となる儀礼との関わりでは、T1 と P2 という二つの発掘区で特殊な廃棄コンテクストが発見された。

##### 4-1-1. T1

T1 は、中央広場と南基壇をつないで設けられた幅 2m 長さ 25m の発掘トレンチである (図 2)。このトレンチの南基壇よりの部分から、複雑な層位が確認され、大量の遺物が出土した (図 3)。その部分では、カンパナユック 1 期と 2 期の層位の重なりが確認され、建築の変化との対応関係を確認することができた。南基壇の上ではカンパナユック 2 期にもう一つ一回り小さな基壇が建造され、同時期に南基壇の北側では床の張替が行われたと考えられる。この床の張替は複数回行われたが、その際に饗宴が行われ、それまでの遺構および床が破壊されたことが確認されている。

図 3 の第 14 層はカンパナユック 1 期の層であるが、その上部は抉り取られたようにへこんだ形状をしており、14 層内部に位置する暗渠もその蓋が外され、破壊されている (図 4)。この遺構の生成過程を考えると、カンパナユック 1 期においては暗渠が機能しており 14 層の上部が床面であったと考えられるが、カンパナユック 2 期の第 10 層に対応する活動が床面を破壊し、同時に暗渠の蓋石を外したという順序になる。これによって暗渠もその機能を停止した。第 10 層と第 9 層からは大量の動物骨、灰、炭、炭化物の付着した土器片が出土し、中には半完形のものも存在した。また注目すべき点として、数多くの固められた土塊が遺物に混ざって出土したことが挙げられる (Matsumoto 2010a: 42)。この土塊はおそらくは 14 層の上部で突き固められて床面として機能していた部分の土と考えられる。また、10 層および 9 層から出土した遺物は、このコンテクストが饗宴と関わっていた可能性を示唆している。調査規模が小さいこと、コンテクスト単位の分析が終了していないことを考えると安易に結論に至ることはできないが、仮説的に以下の流れが想定できよう (図 3)。

1. 第 14 層上部の床および暗渠の破壊、そして饗宴活動。この場合、床の破壊と饗宴の順



序は不明。

2. 饗宴に使用した器、食べ残しなどを破壊された床面のくぼんだ部分に廃棄。第10層、第9層の形成。

第8層の上面が人為的に固められており床面として機能していた可能性が高いことを考えると、さらに下の過程を付け加えることができる。

3. 饗宴後の廃棄行動の後、その上に新たな床面を張りなおす。第8層の形成。

また、第8層がやはり水平な面とはなっておらず、その上部が破壊された可能性を考えると、最終的に神殿が放棄された時の床面と考えられる Floor 1 が形成されるまでに1-3のプロセスがもう一度繰り返された可能性もある。

遺跡全体において堆積が薄いため、このような南基壇北側での建築活動を、同時期に行われた南基壇上部での新たな基壇の建築と直接層位的に結びつけることは不可能であった。しかし、床の張り替えと基壇の建築は同じ時期に行われており、饗宴と連動していた可能性もある。

T1の場合、饗宴の痕跡自体に注目し、「新たな建築活動のための労働力を集めるために饗宴が行われた (labor feast)」とする解釈 (e.g., Vega-Centeno 2007) はある程度有効であるといえよう。ただし、この解釈では、なぜ前時代の遺構、床が破壊されたのか、またなぜ給仕に使用された器が饗宴後の食べ残しと共に廃棄されなければならなかったのかが説明できないのである。このような問題は次節で重点的に考察することとしたい。ここでは暫定的に、カンパナユック・ルミにおいて、形成期後期 (カンパナユック 2 期) の神殿建築の改変には、儀礼として前時代の建築の部分的な破壊および饗宴活動が組み込まれていた可能性を指摘するにとどめておく。

#### 4-1-2. P2

南基壇の西側から特異な廃棄コンテキストが発見された。発掘前の表面観察によってその部分にはおよそ東西 10m 南西 8m に渡って遺物の集中が認められたため、4m×4m の発掘区 (P2) を基壇沿いに設けることとした (図 2、5)。

発掘の結果、P2 は 12 の層からなり、上部の 1-2 層が近年の耕作によって攪乱を受けていたものの、3-12 層は形成期後期 (カンパナユック 2 期) に属する層であることが判明した (図 6)。遺物の大部分は、大量の動物骨と炭化物の付着した土器によって占められ、饗宴後の廃棄コンテキストと想定される。その一方、P2 では他の発掘区からは出土していない特異な遺物が数多く出土し、このコンテキストの形成過程を単なる饗宴から廃棄への流れとして捉えることは適切ではないように思われる。P2 出土遺物の概略は次の通りである。

土器と並んで出土遺物の大部分を占める動物骨の中では、ラクダ科動物が 96% を占める。この数値自体は、ラクダ科動物の家畜化がかなり進んでいた当時の状況を示しており、同時期のデータと矛盾するものではない (e.g., Wheeler 1984)。しかし特筆すべきはその年齢構成である。P2 の発掘から第一指骨、歯など 145 点の年齢同定が可能な部位が出土した

が、その年齢別の構成比（図7）は、現在のリヤマやアルパカの牧畜にみられるものとは大きく異なっている（Miller 1979, 2003: 39）。最も重要なのは、若い個体が消費されている点であり、P2の場合50%以上のラクダ科動物が3才以下で、80%近くが5才以下で死んでいる。

これに対して、ジョージ・ミラーによって1979年に発表された当時のアンデス南高地の牧民のデータによれば、70%以上の個体が3才を超えて生き延び、その比率は5才の生存個体を見ても変わらないという（Miller 1979）。現代の民族誌データとの比較から結論を導くことには慎重でなければならないが、少なくともP2のデータからは、廃棄コンテクストに至る饗宴活動において、若く柔らかいラクダ科動物の肉が必要とされた可能性を指摘できよう。また、ラクダ科動物以外にも海岸部や熱帯にのみ生息する鳥の骨が確認されており（Vásquez and Tham n.d.a）、地元で手に入らない特別な肉が饗宴に供された可能性を示唆している。

調理後、あるいは食事後の残滓が残っている土器片のうち13点を分析したところ、甕の底と考えられる資料4点からトウモロコシの澱粉が検出された。このことは饗宴においてトウモロコシから作られるアルコール飲料であるチチャが供された可能性を示唆している。また、半完形土器が数多く出土しており、他の発掘区ではあまり見られない装飾を凝らした土器が数多く存在することを特筆しておきたい（図8）。

P2からは直接に饗宴とは関わりのない遺物が数多く出土しているが、中でも骨角器の出土状況は特異である。調査全体で118点の骨角器が出土したが、その実に95%にあたる113点がP2から出土したのである。P2が4m×4mの発掘区で全体の発掘面積の7%ほどに過ぎないことを考えると、このコンテクストの特殊性が浮かび上がる。これらの骨角器の中には、6点の小さなスプーンと1点のチューブが含まれており（図9）、いずれも幻覚剤の吸入に使われたと考えられる。

また、黒曜石製尖頭器43点と投槍器1点がP2から出土した（図10）。これらはアンデス考古学においては一般に狩猟具として区分されるが、先に述べた動物骨の分析から狩猟が生業において極めて限定的な役割しか果たしていなかったと考えられるため、このような大量の狩猟具が出土した意味を別に考察する必要があるだろう。興味深いことに出土した黒曜石製尖頭器にはあまり使用した形跡が見られないものが多く、居住域から出土した、繰り返された剥離によって大きく変形した黒曜石製尖頭器とは大きく異なる。また黒曜石に関しては919点の剥片と45点の石核がP2から出土しており、上述の尖頭器を製作する際の副産物であったと考えられる。使用の痕跡が不明瞭な尖頭器に加え、その製作の副産物が大量に出土したことは、これらの尖頭器が非常に限定された用途のために製作され、短期間の使用の後に廃棄されたことを示している。

P2から出土した遺物の中には、特殊な衣装、あるいは個人の装飾品と関わりのあるものがいくつかある（図11）。その中で最も興味深いのは1点の金製品である（図11: a）（Matsumoto and Cavero 2012）。大きさは23mm×11mm程度の小さなもので、薄い金の板が蛇の頭の形に切り抜かれ、打ち出し加工で目が表現されている。特徴的な目の表現をもつこの図像は、チャビン・デ・ワントルにおける典型的な宗教的図像表現と言われるものの一つであり、ランソンやライモンディといった重要な石彫にも見られる（e.g., Rowe

1967)。他にも、土器製耳飾りや緑石のビーズ(図 11: b)、無煙炭製の鏡、やはりチャビン・デ・ワントルに関連する図像表現が施された骨角器(図 11:c-d)などが出土している。

このような P2 出土遺物の特異な組み合わせを解釈する手掛かりは、チャビン・デ・ワントルの図像にある。同遺跡の神殿建築に施された石彫には、儀礼的宗教的図像が数多く表現されているが、P2 から出土した遺物の多くがそれらと関連する(Matsumoto 2010a, 2012)。まず全体的な傾向として、チャビン・デ・ワントルの図像には、儀礼での幻覚剤の使用、つまりシャーマンあるいは神官といった人々が超自然的な存在へと変身するために幻覚剤を吸引したことを示唆する表現が多い(e.g., Burger 1992; Rick 2006; Torres 2008)。ネコ科動物(ジャガー)と人間が融合したような神話的図像が表現されている基壇外壁のほぞ付きの石彫は、まさにその変身のプロセスを表していると考えられている(Burger 1992)。また、他にもこのような神話的な図像が、儀礼を行ったと考えられる公共的な場所、すなわち人々が集まる広場にみられることは、幻覚剤の使用が儀礼において重要な役割を担っていたことを示唆している。P2 から出土したスプーンとチューブは、まさに幻覚剤の吸引のために用いられたと考えられ、同様のものがチャビン・デ・ワントルの発掘でも確認されている(Mesia 2007; Rick 2006)。

さらに、チャビン・デ・ワントルでは狩猟具が儀礼の場で用いられたことを示す図像が存在している。石彫のなかには、特別な衣装を着用し装身具を身に着けた人物が投槍器と尖頭器のついた槍を持っている姿を現したものが存在している。特に、近年の発掘で新たに発見された石彫には、槍を持った人物が儀礼の際の行進に加わっている様子が示されている(Rick 2008: fig. 1.15)。

もう一つ特筆しておくべき点は、この廃棄コンテクストの場が、レリーフで装飾されていた基壇に面していたということである。6 点の土製レリーフ片が第 4 層、第 5 層から出土しており(図 12)、そのうち 3 点にはチャビン・デ・ワントルの図像に見られる目と鼻が表現されている(図 12: a-c)。他の破片にも、曲線や直線が表現されており図像の一部と考えられる。またこれら以外にも、無文ながらレリーフの一部と考えられる表面が磨かれた土の塊が第 3 層から 5 層の間で出土している。P2 の発掘によって露出した基壇の壁面には、その上部にレリーフを施すための空間が設けられており、その部分の壁が十数センチメートル内側に入り込んでいる。またその下部には二つの暗渠の出口が設けられている(図 5, 図 6)。

雨季のある山地に位置するカンパナユック・ルミにおいては未焼成の土製品は残りにくいため、神殿の他の部分も宗教的な図像表現が施されたレリーフで飾られていた可能性はあるが、レリーフを乗せるための空間を有する壁面は他の発掘区では確認されなかった。発掘調査によって検証する必要はあるが、南基壇の P2 に面した部分が、レリーフによる装飾が施された例外的な場所であった可能性は否定できない。また、基壇の暗渠の出口自体が、装飾の一部であった可能性もある。つまり、この廃棄コンテクストが生成された場所は、神殿のなかでも比較的装飾的要素が多かった部分であると解釈する余地がある。こういった要素は、当然のように廃棄物を“ゴミ”として基本的に隠す、つまり「社会的規範を維持するために視界から、そして心から消す」(McNiven 2012: 29)ものとする我々の常識とは矛盾している。この問題に関しては次節で改めて議論することとする。

#### 4-1-3. まとめ

ここで一度、上記の二つの廃棄コンテキストの比較を行っておきたい。どちらの場合においてもコンテキストの生成には饗宴を含む行為が関わっており、食べ残しや使用された土器が廃棄されている。また、半完形土器を含んでおり、機能的には継続して使用可能だったものが饗宴後に廃棄された可能性が高い点も共通している。一方で、両者は以下の二つの点で大きく異なっている。

第一点目は、T1 が動物骨、炭化物が付着した土器片、半完形土器、饗宴の後の食べ残し、あるいは饗宴で使用した器によって構成されているのに対し、P2 の場合は、饗宴における飲食を示唆する遺物のほかにも、広場など公共的な場で行われた儀礼に関連する遺物、また儀礼に使われたモノの製作に際して生じた二次的な生成物が数多く出土している。例えば P2 から出土した黒曜石製の尖頭器は、先に述べたように儀礼的な行進において使用されたと考えられ、大量の黒曜石の剥片と石核は尖頭器の製作を示唆するが、どちらも饗宴における飲食とは直接の関わりがない。同様のことは、骨角器、装身具に関しても言えよう。つまり、P2 の廃棄コンテキストは饗宴の食べ残しとその器以外にも、他の儀礼行為に使用されたモノを数多く含んでいる。このことは、単純な饗宴であった T1 の場合と異なり、P2 の廃棄コンテキストを生成した行為が、饗宴、公共の場での幻覚剤を使用した儀礼、儀礼に使用する道具の製作等を含む、複合的なものであったことを示唆している (Matsumoto 2012)。

第二点目は、廃棄コンテキストと建築との関係、さらにその可視性に関する問題である。T1 の場合は、廃棄コンテキストは新たな床によって隠されてしまい見えなくなる。また、廃棄行動が新たな建築活動、つまり床の張り替えと、おそらくは南基壇上の新たな基壇の建築に対応しているといえる。アンデス形成期において、建築の改変・作り変えは極めて大きな意味を持つため (加藤・関編 1998; 大貫・加藤・関編 2010)、この点は T1 で発見された廃棄コンテキストを理解するために極めて重要である。この問題に関しては、次節で他の遺跡のデータと比較し、より詳しく論じてみたい。これに対して P2 の場合は、廃棄行動と建築活動の関わりは認められない。廃棄物の集積は基壇の外からでも上からでも見える状態にあったと考えられる。また、廃棄コンテキストが、装飾の多く施されていた基壇の部分に対応していた可能性がある。このような配置により、廃棄コンテキストを意図的に見せようとしているとも考えられるが、もしそうであるならば新たな床で廃棄物を視界から遮断してしまう T1 の事例とは対照的であるといえよう。

#### 4-2. サハラパタク遺跡における廃棄コンテキスト

サハラパタクは、ペルー共和国ワヌコ県、アンデス山脈東斜面の盆地中に位置する。その標高は 1898m であり、気候は亜熱帯に属し乾燥している (図 1)。同遺跡は 1966 年に大貫良夫によって登録され、小規模な発掘が行われた。その結果、同遺跡が形成期後期から末期にかけて使用されていたことが明らかとなった (Onuki 1993)。その後 2002 年に井口欣也、大貫良夫を中心に発掘調査が行われ、筆者も発掘に参加し遺物の分析を担当した (井口他 2003; Matsumoto 2010b; Matsumoto and Tsurumi 2010)。

2002年の調査によってサハラパタクの建築が明らかになり、小規模ながらも基壇と方形半地下式広場など形成期神殿の一般的な特徴を備えていることが分かった。また、層位的な発掘と絶対年代のデータにより、神殿建築が機能したのは形成期後期(700-250 cal. B.C.)であり、その間に少なくとも3回の建築の改変が行われたことが明らかとなった。またカンパヌック・ルミの場合と同様、土器と建築の双方の様式は、約100 km北西に位置するチャビン・デ・ワントルの影響を示している(Matsumoto 2010b)。

サハラパタクにおける最初の建築は、後の時期の建築の下に埋もれているためその詳細は不明であるが、この時期に自然の丘をテラス状に成形し、その上に方形半地下式広場と部屋状構造が設けられたことが確認されている(図13)。また半地下式広場には対応する二つの床が重なっており、床の張り替えが行われたことが判明した。これらの二つの床の間からは完形、半完形土器が大量の炭化物と共に数多く見つかった。これがサハラパタクにおける1つ目の廃棄コンテキストである。土器は古い方の床に張り付いており、おそらくは床に叩きつけるようにして破壊されたものと考えられる(図14)。土器の底部に付着していた炭化物を分析したところトウモロコシと、ユカ(マニオク)、そしてジャガイモの澱粉が確認された(Vasquez and Tham n.d.b)。また、磨研が施されグラファイトの充填などの特殊な装飾を持つ、例外的に質の高い土器が出土している。おそらくは、広場の床を張り替える際に饗宴が行われ、その後使用された土器が床に叩きつけるようにして破壊され、その上に新たな床が張られたと考えられる。

次の改変は、それまでの建築を完全に埋める形で行われ、新たな基壇上に方形半地下式広場が設けられ、その周囲に部屋状構造物が配置された(図15)。マウンド北部には広場に入るための複雑なアクセスが設けられ、広場に入るという行為が儀礼の一部であったことをうかがわせる(Matsumoto 2010b)。広場の東側には七つの小規模な部屋状構造が作られ、そのうち一つの内部に、大きな石臼が設置された。さらに広場の南東角の側には1.5m×2mほどの大きさの白い漆喰で覆われた基壇が二つ作られた。

3度目の改変は部屋状構造を埋め、広場に新たな床を張るという形で行われた(図16)。前述した広場の南東角の側に作られた二つの基壇は埋められ、その上に新たな床が張られたが、この基壇の上から数多くの土器片が大量の動物骨、炭化物及び灰とともに見つかった(図15)。これがサハラパタクの二つ目の廃棄コンテキストである。土器の大部分は完形か半完形であり、床に張り付いた状態であった。前述の例と同様に基壇上の床面に叩きつけるようにして破壊された可能性が指摘できる。土器に付着した炭化物を分析したところ、前述の場合と同様にトウモロコシと、ユカ(マニオク)、そしてジャガイモが確認された(Vasquez and Tham n.d.b)。この廃棄コンテキストもやはり新たな床によって封印されており、3度目に建築を改変する前に饗宴が行われたと想定される。

これらの二つの廃棄コンテキストから出土した土器片30点に関して顕微鏡を用いた付着物の分析を行った(Matsumoto 2010b; Vasquez and Tham n.d.b)結果、25点の破片から、ジャガイモ、ユカ(マニオク)、トウモロコシのうちいずれかの澱粉が確認された。興味深いのは、トウモロコシが口縁径20 cmを超える短頸壺あるいは無頸壺からのみ検出されたことである。このような土器は現在の民族誌や後代の事例によれば、トウモロコシの酒であるチチャを醸造するために使用される(Hastorf and Johannessen 1993; 関 1998a)。その

ためサハラパタクのデータはトウモロコシが食料というよりはチチャの醸造に特化して用いられていたことを示唆しており、新たな建築活動を行う際にチチャを用いた饗宴が行われたと想定できる。

このようなデータは、サハラパタクの場合でも、前述のカンパナユック・ルミの事例と同様に饗宴に関わっていたモノを、機能的にはおそらく問題がなかったにもかかわらず廃棄したことを示唆している。また、饗宴とその後の廃棄行為が神殿における建築活動と連動しており、廃棄コンテキストが床下に封印される点も、カンパナユック・ルミの T1 の事例と類似している。

## 5. 考察

前節で四つの廃棄コンテキストの概要を記述した。本節では、これらのデータを他の遺跡の事例と合わせて総合的に解釈する。その際に、第 1 節と第 2 節で論じた行動考古学と実践理論を理論的な枠組みとして用いる。

四つの事例はそれぞれに異なる要素を有してはいるが、カンパナユック・ルミにおける T1 の事例とサハラパタクの二つの事例は、(1)饗宴後の廃棄、(2)建築活動との関わり、という重要な 2 点が共通しており類似性が高いといえる。これに対して、カンパナユック・ルミの P2 の事例は、(1)建築活動と関わっていない点、(2)廃棄物が視界から隠されていない点、(3)饗宴以外の様々な儀礼的要素が見られる点、の 3 点で前者とは異なっている。したがって本節では便宜上(1)カンパナユック・ルミの T1 とサハラパタクの二つの事例、(2)カンパナユック・ルミの P2 の事例、に分けて論じることとする。

### 5-1. 神殿更新と饗宴・廃棄

先にも述べたように、カンパナユック・ルミの T1 とサハラパタクの廃棄コンテキストは、神殿建築の改変と深く関わっている点が重要である。このような事例は他の形成期神殿においても確認されている。たとえば、リチャード・バーガーと共にペルー中央海岸ルリン谷において形成期前・中期の大神殿であるカルダル遺跡を調査したルーシー・サラサールは、やはり床下から饗宴後の廃棄コンテキストを確認しており (Salazar 2009: 88, 92)、饗宴が神殿建築の改変に際して行われた儀礼行為であったと論じている。また、同じ中央海岸でカルダルに先行する形成期早期の神殿建築セロ・ランパイを調査したラファエル・ベガ＝センテノも、饗宴が建築活動と密接に結びついていた点を指摘している (Vega-Centeno 2007)。さらに、両者ともに、このような神殿建築の改変は、「神殿埋葬」の概念 (Izumi and Terada 1972) で説明可能だとしている。若干横道にそれるが、ここで一度神殿建築の改変にかかわる二つの概念を整理しておきたい。

一つ目は、今触れた「神殿埋葬」である。これは東京大学アンデス地帯学術調査団が 1960 年代に行ったペルー中央高地のコトシュ遺跡の発掘データをもとに提示した概念であり、定期的に神殿建築を作り変える習慣、あるいは信仰が存在し、古い神殿建築は一定の儀礼的な手続きに従って「埋葬された」という考えである (Izumi and Terada 1972; 大貫 1998, 2010: 78)。もう一つの概念は、「神殿更新」であり、これはその後日本のアンデス調査団が、

長年にわたるデータの蓄積をもとに前述の「神殿埋葬」の概念を発展させた考え方である(e.g., 加藤・関編 1998; 大貫・加藤・関編 2010)。「神殿埋葬」とは、神殿を儀礼的手続きに沿って埋めることを指すが、「神殿更新」は「埋めて封印することが目的ではなく更新し、新たな場所で儀礼をおこなうことが重要であった」(関 1998b: 304)とみなすのである。この視点によれば更新のプロセスを繰り返すことで、神殿は必然的に大きくなり、それを維持するための社会組織が生まれることとなる。神殿建築の改変が儀礼的なものであったという「神殿埋葬」の考え方を受け継ぎ、建築活動に伴う社会変化を視野に入れている点でより包括的な視点を提示することに成功しているため、本論でも神殿建築の改変の解釈に「神殿更新」の概念を適用する。カルダルにおいてサラサールが報告した事例も神殿更新として捉えることが適切であろうし、サハラパタクとカンパナユック・ルミの T1 における廃棄コンテクストも、神殿更新と儀礼行為との関わりという視点から考察することに意義があるだろう。

カンパナユック・ルミ、サハラパタク、カルダル、セロ・ランパイの事例は、いずれも「神殿更新を行う前に饗宴を行い、その際に用いられた器と骨などの食べ残しを新たな建築の床下に埋める」という儀礼的過程が中央アンデスの各地で繰り返されていたことを示唆している。では、饗宴と神殿更新はどのように関わっていたのだろうか。この点について、ベガ＝センテノは、先にふれたセロ・ランパイの事例を用いて興味深い解釈を提示している。以下に彼の論を簡単にまとめておく。

彼によれば、セロ・ランパイにおける饗宴は、建築活動の直前に行われており、偶発的に行われたものではない。むしろ必要な過程として建築順序の中に組み込まれていたのだという(Vega-Centeno 2007: 166)。また神殿建築の改変の際には埋葬される神殿の清掃が行われ、饗宴後の廃棄が特定の場所で行われたことも示唆している。ベガ＝センテノは、このようなセロ・ランパイのデータに関して、饗宴には建築活動に必要な労働力を集めるための役割があったという機能主義的な解釈を与えている。この解釈の基礎として、マイケル・ディートラーが提示したコメンサル・ホスピタリティ(commensal hospitality: 共食によるもてなし)の概念を援用し、饗宴を社会的、経済的、そして政治的な役割を有する場として捉え、権威と社会的価値、そして象徴資本を獲得する戦略として位置づけている(Dietler 2001: 69; Vega-Centeno 2007: 166)。このような饗宴のあり方は、一般に互酬性あるいはリーダーの政治戦略と密接に結びついており(e.g., Dietler and Hayden (eds.) 2001)、アンデスにおいてもエスノヒストリーの事例が多く報告されている(e.g., Hastorf and Johnnessen 1993; ロストウォロフスキ 2003)。またこの解釈は、中央集権、階層化など社会の複雑化が未発達であった社会において人々が大規模な建造物を作ることができたのはなぜか、という問いに対しても一定の説得力を有した解答を提示している。今後形成期神殿において確認される可能性のある類似したコンテクストにも広く適用可能なモデルであり、神殿更新の初期段階を議論するうえでも有効であろう。実際に筆者も先述のサハラパタクの事例を解釈するためにベガ＝センテノの議論を援用したことがある(Matsumoto 2010b)。

しかし、このような社会発展と関連付けた機能主義的な議論、つまり新進化主義的思考の影響を受けたプロセス考古学の視点に対する批判が近年強まっているのも事実である

(e.g., Pauketat 2007; Yoffee 2005)。一方、遺構をテキストとして「読む」ことが重要であるとする視点は、ポストプロセス考古学の側から提示されて 20 年を経た今なおその重要性を増している (e.g., Hodder 1986; Hodder and Hutson 2003)。ここまで見てきた形成期神殿における廃棄コンテキストに関してしてみると、饗宴を社会的な交渉の場として捉えるベガ＝センテノの議論からは、なぜ饗宴の廃棄物はその場所に埋められる必要があったのか、なぜサハラパタクの事例のように饗宴で使用された器までもが意図的に破壊されねばならなかったのか、さらには新たな建築活動を行う前に神殿を特定の手続きに従って埋葬するという行為にどういった意味があったのか、といった問題の解答を導き出すことは困難である。筆者はこのような問題を考察するために、2 節で述べた行動考古学の理論的枠組み、特にウォーカーの提示する廃棄コンテキストの類型化 (Walker 1995a, 1995b) が有効であると考えられる。以下で詳しく論じてみたい。

カンパナユック・ルミの T1、サハラパタク、そしてカルダルの事例では、饗宴後に食べ残しと使用された土器が廃棄され、床下に封印されている点が共通している。特にサハラパタクの事例の一つでは、食べ残しの動物骨、調理などに使用された燃料と考えられる炭化物と灰、おそらくはトウモロコシ酒 (チチャ) の醸造に使用された大きな短頸壺と無頸壺、調理に使用されたと考えられる炭化物が付着した無頸壺、数多くのすり石、給仕用の多数の碗などが広場周りの一角に廃棄されており、広場において饗宴が行われ、その際に用いられたモノ一式が饗宴後に廃棄された様子が見えてくる。また、サハラパタクのもうひとつの事例から、饗宴に用いられていた土器の中に、例外的に豊かな装飾的要素を有する土器が存在したことが明らかになっている。重要なのは、いずれの場合においても完形の土器が床面に張り付いた状態で発見されており、意図的に叩きつけるような形で壊されたと考えられる点である。このような土器に関して、前述のライフヒストリーという視点で見ると、製作をめぐる社会的背景の確認はできないものの、饗宴後にいまだ器としての機能には問題がない状態で破壊され、その後新たな床によって封印されるという形でその一生を終えたことになる。サハラパタクの他の発掘区からは破断面付近に錐のような道具で穴を開けた土器片が数多く出土した。この穴は補修孔であり、ひびの入った、あるいは割れた土器を穴に紐を通して再接合し使用し続けたことを意味している。つまり、通常サハラパタクの土器は、その機能を果たすことが困難になるまで修復して使い続けられた末に終焉を迎えるが、そのライフヒストリーは饗宴で使用された土器の場合と大きく異なることは疑いない。その一方で、饗宴遺構から出土した土器は、一部の特殊な装飾的ものを除けば、給仕用と考えられる碗など、サハラパタクの土器様式の中でも一般的なものが多く、それまで日常的に使用されていたものであった可能性もある。おそらく製作の時点では、一部を除いて、その後饗宴で使用されることになる土器と日常用の土器は区分されていなかったのではないだろうか。もしそうであるならば、サハラパタクにおいて饗宴後の廃棄コンテキストから出土した土器群は饗宴において使用されることで、他とは大きく異なるライフヒストリーをたどったことになる。先に用いたコピトフの「単一化」の概念を用いるならば (Kopytoff 1986)、日常品 (commodity) としてのライフヒストリーを送っていた土器は、饗宴で使用されることで、経済的に交換不可能なものとなり単一化するライフヒストリーへと移行したことになる。



労働力を集めるための饗宴において、なぜモノのライフヒストリーそれ自体に変化が生じたのか。この点を考察するためには、再び「神殿更新」の概念に立ち戻る必要がある。神殿更新の目的は埋めて封印することではなく、新たに儀礼をおこなうための場所を作り出すことが重要であった(関 1998: 304)とされている。つまり神殿更新とは、神殿を「埋葬」するだけではなく、「更新」することにこそ社会変化の鍵があるという考え方である。しかしここでは、あえて埋めて封印する「埋葬」の方に注目してみたい。コトシュにおける形成期早期の事例にも見られるように、神殿の更新に際しては新たな建築活動の前に、儀礼的な手続きでそれまでの神殿が「埋葬」(Izumi and Terada 1972)されることが多かった。本論で扱った事例の中でも、サハラパタクの二つの事例は、饗宴後にそれまでの建築が新たな建築によって埋められており「埋葬」といってよい。こうした事例では、饗宴を行いその痕跡を神殿の埋葬、あるいは封印の材料として用いることが儀礼の手続きとして更新活動の中にプログラムされていた、という解釈が可能であろう。

では次に、なぜ饗宴後の土器が廃棄されねばなかったかという点を、ウォーカーによる廃棄行動の類型化によって考察してみたい。筆者は、本論で扱った四つの事例は彼の定義の「儀礼的廃棄」と「クラトファノス廃棄」によって解釈が可能であると考えている。先にも述べたように「儀礼的廃棄」の骨子は、社会のなかで儀礼的コンテクストにおいて用いられたモノは、聖化されて(ritually charged)しまつて日常的コンテクストに戻ることはできず、特別な手続き、方法で廃棄する必要がある、ということである(Walker 1995a, 1995b)。この場合、神殿更新という儀礼行為に含まれた饗宴で使用され、聖化された土器は、古い神殿を廃棄・埋葬する際の埋土の一部となって廃棄される必要があったことになる。これに対し「クラトファノス廃棄」は、モノが単一化されることが危険である場合に、そのモノを現実的な意味であれ象徴的な意味であれ殺すという行為が発生した痕跡を指す(Walker 1995a, 1995b)。この場合、埋葬される神殿に関わる儀礼としての饗宴によって単一化された土器が、新たな神殿という場において危険性を有するとみなされたために、古い神殿と共に封印されるという形で殺されたという解釈が可能であろう。この二つをウォーカーは分別可能なものとして定義しているが、実際の考古学的データに即した時に両者の境界を見出すことは困難である。後者の解釈は前者と矛盾するものではなく、前者の解釈にある程度の具体性を加えたものとみなすことができよう。いずれにせよここで重要なのは、「儀礼化された饗宴によって単一化された土器が廃棄される」という過程が、これらの二つの類型によってある程度説明が可能であるという点である。

このようなウォーカーの類型化を用いた分析は、人とモノとの間に存在する相互作用に焦点を当てるための手法である。本論の場合は、儀礼行為を通じて、それまで日常用とみなされていたモノ・道具が単一化されて儀礼用として再定義される(Walker 1995a: 96)、というライフヒストリーを浮かび上がらせるために用いた。では次に、モノが単一化され、廃棄される過程とよりマクロな社会構造との関わりを、実践理論を用いて考察してみたい。

先述の通り、カンパナユック・ルミのT1とサハラパタクの事例は、饗宴が神殿更新の過程において儀礼の一部としてプログラムされていた可能性を示唆している。では、饗宴から廃棄にいたる儀礼行為は、神殿更新というマクロな現象とどのように関わったのか。この点に関して、近年のヨーロッパとオセアニアにおける貝塚と廃棄行為の研究において興

味深い事例が提示されており、解釈の参考にすることができる。これらの研究は、貝塚あるいは日常生活のゴミ捨て場が、単に生活に不要になったものを捨てるための場ではなく、様々な意味づけがなされたものであったことを示している。例えばジュリアン・トーマスは、新石器時代のイギリスにおいて、ある種の廃棄行為は饗宴や集会などの特定のイベントを記念し、ある特定の慣習や社会的集団化に関する記憶に恒久性を与えたと論じている (Thomas 1999)。他にも、過剰な消費 (conspicuous consumption) を伴う饗宴の廃棄物が空間を概念的に分けるモニュメントとしての役割を果たした (McOmish 1996: 75) という解釈や、繰り返される廃棄と堆積の過程が社会的成功や豊かさを示すシンボリズムを生成した可能性を示唆する論考 (Needham and Spence 1997) がある。また、近年オーストラリア北東部の島嶼地帯で漁労民の研究を行っているイアン・マクニブンは、ジュゴンの骨塚の 1000 年以上に亘るその形成プロセスを行動考古学と実践理論の視点から論じ、骨塚が記念碑的な性格を帯び、廃棄行為自体が人間集団の継続性を示し、骨塚に小児などの埋葬を加える行為は、記念碑的な「生きる建造物 (living architecture)」としての骨塚に各集団を「関連付ける (referencing)」結果をもたらしたとしている (McNiven 2012: 25)。こういった解釈には、実践理論の影響が色濃く表れており、廃棄行為という実践が人間集団の記憶や継続性と関わり、歴史的過程の中でよりマクロな社会構造に影響を与えていく過程が描写されている。当然のことだが、これらのデータは時代的にも地域的にも本論で扱う中央アンデス形成期とは状況が大きく異なる。しかし、「廃棄行為が社会を構造化し、またそれによって行為主体と社会の関係が新たに構造化される」という視点自体は有効なヒューリスティックデバイスであり、神殿における廃棄行動を考察するためにも有益であろう。以下で先述の形成期神殿の事例を同様の枠組みによって解釈してみたい。

複雑社会における饗宴には、何かを記念する行事という役割があり、その記憶を参加者と共有する結果をもたらす (e.g., Pauketat et al. 2002)。この点を考えたときに、饗宴後の遺物を廃棄する行為が、社会的な記憶 (social memory) (e.g., Mills and Walker (eds.) 2008) を形成・維持し、人間集団と遺構を関連付けていくという上記の貝塚・骨塚研究からの視点は重要である。これを、上述の形成期神殿の例に応用するならば、まずは「饗宴が神殿更新に際しての記念行事的な側面を有しており、なおかつ神殿における儀礼として重要なものであり、結果として饗宴で用いられたものが単一化され廃棄される必要があった」ということが前提となる。新たに建築する神殿の一部として饗宴後の廃棄物を埋めるという行為には、饗宴とその後の建築活動に参加し、記憶を共有した人間集団を新たな神殿と密接に関連付けることとなったであろう。また度重なる更新活動とこのような饗宴/廃棄が対応していたならば、それは参加した人間集団の神殿に対する記憶と関係を維持・強化する結果をもたらしたであろう。つまり、饗宴を行いその場で使用されたモノを廃棄するという行為が、神殿の建築と維持を行う人々と神殿との関係を構築した結果、神殿更新という行為を継続することが可能となり、また一方で饗宴と神殿更新を繰り返すことで神殿と人間集団の関係がさらに強化・維持されたとも考えられる。このような結果が、行為主体の側から見たときに意図されたものであったか、意図せざるものであったか (e.g., Dornan 2002: 319-324; Joyce 2004) を考察することは困難であるが、中央アンデスの広い範囲で、形成期後期に社会の階層化を示すデータが急激に増加することを考えると (e.g.,

Burger 2008; Onuki and Inokuchi 2011; Seki et al. 2010)、この時期に台頭しつつあったリーダー層がこのような過程を意図的に利用するようになる、つまり特定の人物・グループのエージェンシー (e.g., Flannery 1999; Walker and Lucero 2000) が重要になるという可能性を指摘できる。

## 5-2. ディスプレイとしての廃棄

本節の冒頭でも述べたが、カンパナユック・ルミの P2 の事例は、(1)建築活動と関わっていない点、(2)廃棄物が視界から隠されていない点、(3)饗宴以外にも様々な儀礼的要素が見られる点で他の事例と異なっている。類似した事例は、チャビン・デ・ワントルにおいて確認されている (Mesia 2007)。同遺跡において神殿と北側の居住区との間に位置するワチュクサ区を発掘したクリスチャン・メシアは、48 m<sup>2</sup>に及ぶ範囲に、深さ 2m に渡って多数の動物骨、土器、幻覚剤の吸引に使用されたと考えられる骨角器、そして海岸部からもたらされた貝類が層位的に堆積していたことを確認している (Mesia 2007: 92-93, 129-135)。彼によれば、この堆積は「世帯を超えた規模の饗宴が行われ」(Mesia 2007: 135) その残存物が繰り返し同じ場所に廃棄された結果であるという (Mesia 2007: 130)。筆者も饗宴の痕跡がワチュクサ区の堆積に含まれているという点には同意するが、幻覚剤の吸引のための道具が出土していることから、カンパナユック・ルミにおける P2 の場合と同様に、幻覚剤を用いた儀礼行為の中に饗宴が位置づけられていたと見るべきであろうと考えている。層位の状況を見ても (Mesia 2007: 211-212) この堆積は建築の一部ではなく、カンパナユック・ルミの場合と同様に地上に露出していたと考えられる。また、神殿と居住域の間に位置していることから比較的人々の視界に入りやすい位置であったはずである。ワチュクサ区出土遺物の全体像が不明であるため安易に結論を出すことはできないが、この事例はカンパナユック・ルミでの P2 の事例と上記の(1)~(3)の点で共通している可能性が高い。

ウォーカーによる儀礼後の廃棄コンテキストの類型を用いるならば、カンパナユック・ルミの P2、チャビン・デ・ワントルのワチュクサ区の事例の両方とも、「儀礼的廃棄」の概念によって解釈が可能であると考えられる。幻覚剤を用いて公共の場で行われた儀礼で用いられたモノは、聖化された (ritually charged) とみなされ、特定の手続きで廃棄する必要があったことになる。

儀礼的廃棄に分類可能であるという点では前段で考察した廃棄コンテキストと同様であるが、上記の 3 点にみられるような違いは、廃棄されたモノが単一化される過程の違いと対応している。ウォーカーは儀礼的廃棄のバリエーションを示すためにいくつかの民族誌データを用いているが (Walker 1995b)、その中でもウィリアム・ダベンポートの調査によるソロモン諸島の事例 (Davenport 1986) がここで論じる事例を解釈するための参考となるだろう。ソロモン諸島の事例では、葬送儀礼に伴う饗宴において、人々は精緻な装飾が凝らされた給仕用の器を含む儀礼具を食べ残しと共に廃棄してしまう。ダベンポートによれば、このような行為の背景には、聖化されたモノを日常的な脈絡に戻すような「脱聖化のための儀礼」(desacralizing ritual) が存在しないという事情がある。そのため「聖餐における食べ残しやゴミなどを含む聖なるモノを脱聖化する通常の方法は、それらを他と切

り離して放置し風化するに任せることとなる」(Davenport 1986: 107)。そして一度儀礼に使用されたモノには霊性が付与され、社会的、宗教的な価値が経済的な価値にとって代わることとなる。結果的に、そのモノは交換不可能な財として単一化されてしまう(Kopytoff 1986)。カンパナユック・ルミの P2 およびチャビン・デ・ワントルのワチェックサ区の事例も「儀礼で使用された、経済的に価値のありそうなモノ(石器、骨角器、装飾具など)が饗宴の食べ残しと共に廃棄される」という点でソロモン諸島における廃棄行為の例と共通しているといえよう。

モノが単一化されていく過程という点ではカンパナユック・ルミの P2 の事例が興味深い。儀礼で使用された用具のうち、黒曜石製の尖頭器および骨角器の製作に関係すると考えられる遺物が数多く出土しているのである。例えば石核や大きな剥片の黒曜石、多くの加工痕のある未成品の骨角器であり(Matsumoto 2010a)、儀礼で使用されたモノの製作時の廃棄物はそのモノ自体と共に出土している。このことは、黒曜石と骨角器が日常的なコンテクストから儀礼的なコンテクストに移ることによって単一化されるというライフヒストリーを辿るのではなく、その製作時から儀礼的用途で使用されて単一化されることが決定づけられていたことを意味する。

カンパナユック・ルミの P2、チャビン・デ・ワントルのワチェックサ区の事例の双方とも廃棄行為が繰り返し行われたことを示唆している(Matsumoto 2012; Mesia 2007: 92)。ではここで述べた事例を、行為主体が社会を構造化し、社会によって行為が構造化されるという実践理論の視点から見るとどうなるだろうか。この問題に関しては、先にも引用したマクニブンの論考が廃棄物とゴミに関して極めて重要な解釈の枠組みを提示している(McNiven 2012: 29)。彼はトレス海峡諸島の人々の間に、我々が通常用いる意味でのゴミ(rubbish)という概念が存在していたかどうかという疑問を抱き、1000年以上に亘って形成された骨塚の分析を通じて、村中の良く目に付く場所に位置している骨塚は、貝や骨などの食料の副産物が、役に立たない、価値のない、いらぬものとして隠され、忘れ去られるべきモノとして扱われたわけではなかったと結論付けた。さらに、そのようなモノがゴミとは対照的なモノ、すなわち保持され、尊重され、管理され、飾られ、記憶されるモノとして扱われた可能性を指摘している。彼は、食べ残しなどの食料の副産物が、視覚、触覚、嗅覚を通じて、日常的に情報を伝達することができたと考えており、このような場合には、「象徴的社会的価値を持って繰り返される廃棄という実践が廃棄物の堆積にエージェンシーを吹き込み、再帰的に社会を構造化し再生産することを可能とする」(McNiven 2012: 29)と述べている。

単一化され、儀礼的廃棄という形で廃棄されたカンパナユック・ルミの P2 とチャビン・デ・ワントルのワチェックサ区の事例も、上記のマクニブンの論を用いて実践理論の視点から解釈が可能であろう。別稿でも論じたとおり、P2 の出土遺物は儀礼に用いられたモノの多くが廃棄されたことを示しており(Matsumoto 2012)、なおかつ遺構自体が当時は視界から隠されてはおらず、人々の目に付く場所に位置していた。この状況をマクニブンの論に従って解釈するならば、カンパナユック・ルミの P2 は、公共的な場で行われた儀礼(Matsumoto 2012)の情報を視覚、触覚、嗅覚を通じて知覚することを可能にしたと考えられる。大量の土器や食べ残しは盛大な饗宴が行われたこと、儀礼の規模が大ききもので

あったことを示したであろう。食べ残しからは饗宴に供された食事が特別であったことが分かったかもしれないし、特別な土器が使用されたことが確認できたかもしれない。黒曜石や骨角器などは、儀礼で使用されるべき道具がどのようなものであるか、またどのような儀礼がおこなわれたかという情報を発信したかもしれないし、剥片や未成品などが道具の製作に関する情報のソースであったかもしれない。このように考えると、繰り返される廃棄行為が儀礼に関する記憶の保持を促した可能性が指摘できよう。この場合人々は日常的に、廃棄コンテキストから儀礼に関する情報を得ていたことになる。また廃棄行為が人間集団の記憶と関わり、ヒトとモノを関連付けていた、という解釈を用いるならば、このような廃棄コンテキストは儀礼とその後の廃棄行為に加わった人間集団を関連付け、共有された記憶を次の儀礼が行われるまで維持する役割を果たしたのかもしれない。同様に、一般に特殊な墓から発見されることの多い金製品や装飾品 (e.g., Onuki and Inokuchi 2011) が少量ながら P2 から出土したことも偶然と見なすべきではない。これらの装身具を身に着けることができた少数の人間が、儀礼と自らの立場を関連付け、その情報を発信するという意味があった可能性を指摘できる。このような解釈は、先述したチャビン・デ・ワンタルのワチェックサ区の事例に関しても成り立つであろう。

まとめると、まず廃棄行為が儀礼に関する情報のディスプレイとなるコンテキストを生み出し、それによって儀礼行為と人間集団が関連付けられ、儀礼に関する様々なレベルでの記憶の保持が可能となった。さらにそのことが儀礼を行い参加する集団を維持し、神殿における儀礼を継続するためのメカニズムの一つとなっていた。ではこのような結果は、行為主体の側から見たときに意図されたものであったのだろうか、それとも意図せざる結果であったのか (e.g., Dornan 2002: 319-324; Joyce 2004)。筆者は、少なくともカンパナユック・ルミの P2 の事例に関しては意図的なものであったと考えている。第4節で述べた通り、P2 が面していた基壇の壁面は宗教的図像表現を施したレリーフや暗渠など、例外的に装飾的な要素が多くみられる場所であり、廃棄の場として特にそのような場所が意図的に選択された可能性があるからである。この場合、レリーフで飾られた基壇と廃棄コンテキストが一体となって一つのモニュメントとして提示されていた可能性を指摘しておきたい。

## 6. おわりに

近年アンデス形成期の研究の進展は目覚ましく、精緻な編年研究から図像表現の解釈、社会発展プロセスのモデル化に至るまでの多様な研究が展開されている (e.g., Conklin and Quilter (eds.) 2008; Kaulicke and Onuki (eds.) 2010a, b; 大貫・加藤・関編 2010; 加藤・関編 1998)。ただ、儀礼という点を取り上げたときに、現時点では儀礼行為に焦点を当てた研究自体がそれほど多くはないため、儀礼的コンテキストを抽出・解釈し、社会との関係を論じるための理論的な枠組みの整備は十分ではない。本論ではこの点を打破するために、行動考古学的と実践理論という二つの理論的枠組みを用いた。モノのライフヒストリー、ウォーカーによる廃棄コンテキストの類型を用いて、ヒトとモノとの相互作用を描写し、それを基礎として実践理論を用い、ヒト、モノのエージェンシーとよりマクロな社会

構造との再帰的な関係性を論じた。第 1 節及び第 2 節で述べた通り、このようなアプローチは儀礼の宗教的、象徴的意味を考察するものではなく、人々が儀礼の実践を通じて社会を変革するという過程に焦点を当てるための手法である。このような視点は、近年の物質文化研究において重要なテーマとなっているモノのエージェンシーに関する議論とも関わっており (e.g., Gell 1998; Mills and Walker (eds.) 2008)、モノがそこに込められた象徴的な意味を超えて主体的に社会と関わり続けていく過程を描き出すことを重要と見なす点で共通している (e.g., Pollard 2008: 45)。

アンデス形成期の神殿における儀礼行為は、多くの異なる宗教イデオロギーのもとで組織化され、幅広い時間的空間的な多様性を有している (e.g., Burger 2008; Burger and Salazar-Burger 1980, 1998; Moore 1996; 大貫 1998, 2010)。本論で検討できた事例は、実際に行われた儀礼の多様性の中の極々一部であることは疑いようがない。ただし、本論で示した視点は、過去のデータの再検討、今後の新たなデータの考察に際しても応用可能なものであり、形成期の儀礼行為の多様性を認識し、その社会との関わりを考察するための一助となると考える。

## 参考文献

亜子島 香

2004 「中範囲理論」、安斎正人編『現代考古学辞典縮刷版』、pp. 312-316、同成社。

Bell, Catherine

1997 *Ritual: Perspectives and Dimensions*, Oxford: Oxford University Press.

Binford, Luis R.

1962 “Archaeology as Anthropology,” *American Antiquity* 28: 217-225.

1983 *In Pursuit of the Past*, London: Thames and Hudson.

Bourdieu, Pierre

1977 *Outline of Theory of Practice*, Cambridge: Cambridge University Press.

Bradley, Richard

2005 *Ritual and Domestic Life in Prehistoric Europe*, London: Routledge.

Burger, Richard L.

1992 *Chavín and the Origins of Andean Civilization*, New York: Thames and Hudson.

2008 “Chavín de Huántar and its sphere of influence,” In Silverman, H. & W. Isbell (eds.), *Handbook of South American Archaeology*, pp.681-703, New York: Springer.

Burger, Richard L. and Lucy Salazar-Burger

1980 “Ritual and religion at Huaricoto,” *Archaeology* 33: 26-32.

1998 “A sacred effigy from Mina Perdida and the unseen ceremonies of the Peruvian Formative,” *RES: Anthropology and Aesthetics* 33: 28-53

Conklin, William and Jeffrey Quilter (eds.)

- 2008 *Chavín: Art, Architecture and Culture* (Cotsen Institute Monograph 61), Los Angeles: Cotsen Institute of Archaeology, University of California.
- Dietler, Michael
- 2001 “Theorizing the feast. Rituals of consumption, comensal politics, and power in African Contexts,” In Dietler, M. & B. Hayden (eds.), *Feasts. Archaeological and Ethnographic Perspectives on Food, Politics and Power*, pp. 65–114, Washington D.C.: Smithsonian Institution Press.
- Davenport, William H.
- 1986 “Two kinds of value in the eastern Solomon Islands,” In Appadurai, A. (ed.), *The Social Life of Things: Commodities in Cultural Perspective*, pp. 95-109, Cambridge: Cambridge University Press.
- Dietler Michael and Brian Hayden (eds.)
- 2001 *Feasts. Archaeological and Ethnographic Perspectives on Food, Politics and Power*, Washington, DC: Smithsonian Institution Press.
- Dobres, Marcia-Anne and John Robb (eds.)
- 2000 *Agency in Archaeology*, London: Routledge.
- Dornan, Jennifer L.
- 2002 “Agency and archaeology: past, present, and future directions,” *Journal of Archaeological Method and Theory* 9: 303-329.
- Earle, Timothy and Robert Preucel
- 1987 “Processual archaeology and the radical critique,” *Current Anthropology* 28: 501-538.
- Eliade, Mircea
- 1958 *Patterns in Comparative Religion*, New York: Sheed and Ward.
- Flannery, Kent V.
- 1982 “The golden Marshalltown: a parable for the archeology of the 1980’s,” *American Anthropologist* 84: 265-278.
- 1999 “Process and agency in early state formation,” *Cambridge Archaeology Journal* 9-1: 3-21.
- Flannery, Kent and Joyce Marcus
- 1993 “Cognitive archaeology,” *Cambridge Archaeological Journal* 3-2: 260-267.
- Fogelin, Lars
- 2007 “The archaeology of religious ritual,” *Annual Review of Anthropology* 36: 55-71.
- Gamble, Clive
- 2001 (2004) *Archaeology: The Basics*. London: Routledge. (『入門現代考古学』、田村隆訳、同成社)
- Gell, Alfred
- 1998 *Art and Agency: An Anthropological Theory*, Oxford: Clarendon Press.
- Giddens, Anthony

- 1979 *Central Problems in Social Theory: Action, Structure, and Contradiction in Social Analysis*, Berkeley: University of California Press.
- Gould, Richard A. and Michael B. Schiffer (eds.)
- 1981 *Modern Material Culture: The Archaeology of Us*, New York: Academic Press.
- Haas, Jonathan and Winfield Creamer
- 2006 “Crucible of Andean civilization,” *Current Anthropology* 47-5: 745-775.
- Hastorf, Christine A. and Sissel Johannessen
- 1993 “Pre-Hispanic Political Change and the Role of Maíz in the Central Andes of Peru,” *American Anthropologist* 95: 115-138.
- Hawks, Christopher.
- 1954 “Archaeological theory and method: some suggestions from the Old World,” *American Anthropologist* 56: 155-68.
- Hodder, Ian
- 1982 *Symbols in Action*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 1986 *Reading the Past: Current Approaches to Interpretation in Archaeology*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 1991 “Interpretative archaeology and its role,” *American Antiquity* 56: 7-18.
- Hodder, Ian and Scott Huston
- 2003 *Reading the Past: Current Approaches to Interpretation in Archaeology*, 3rd Edition, Cambridge: Cambridge University Press.
- Ikehara, Hugo and Shibata Koichiro
- 2008 “Festines e integración social en el Periodo Formativo: nuevas evidencias de Cerro Blanco, valle bajo de Nepeña,” *Boletín de Arqueología PUCP* 9: 123-160.
- Inokuchi Kinya (井口欣也)
- 2001 「神殿と図像—中央アンデス地帯形成期のクントゥル・ワシ神殿における図像表現の変容プロセス—」『国立民族学博物館研究報告』25-3: 385-431。
- 井口欣也・大貫良夫・鶴見英成・松本雄一・ネリ・マルテル・カスティーヨ
- 2003 「ペルー、サハラパタク遺跡の発掘調査」『古代アメリカ』6: 35-52。
- Izumi, Seiichi and Kazuo Terada
- 1972 *Andes 4: Excavations at Kotosh, Peru, 1963 and 1966*, Tokyo: The University of Tokyo Press.
- Joyce, Rosemary A.
- 2004 “Unintended consequences? Monumentality as a novel experience in Formative Mesoamerica,” *Journal of Archaeological Method and Theory* 11-1: 5-29.
- Kato, Yasutake (加藤泰建)
- 1993 “Resultados de las excavaciones en Kuntur Wasi, Cajamarca,” In Millones, L. & Y. Onuki (eds.), *El Mundo Ceremonial Andino* (Senri Ethnological Studies 37), pp.199-224, Osaka: National Museum of Ethnology.
- 1998 「序章 アンデス文明の起源を求めて」、加藤泰建・関雄二編『文明の創造力』、



pp. 7-42、角川書店。

加藤泰建・関雄二編

1998 『文明の創造力』、角川書店。

Kaulicke, Peter and Yoshio Onuki

2010a *El Período Formativo en el Perú: enfoques y evidencias recientes, Cincuenta años de la Misión Arqueológica Japonesa y su vigencia. Primera parte* (Boletín de Arqueología PUCP 12), Lima: Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú.

2010b *El Período Formativo en el Perú: enfoques y evidencias recientes, Cincuenta años de la Misión Arqueológica Japonesa y su vigencia, Segunda parte* (Boletín de Arqueología PUCP 13), Lima: Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú.

Kopytoff, Igor

1986 “The cultural biography of things: commoditization as process,” In Appadurai, A. (ed.), *The Social Life of Things: Commodities in Cultural Perspective*, pp.64-91, Cambridge: Cambridge University Press.

Matsumoto, Yuichi

2010a *The prehistoric ceremonial center of Campanayuc Rumi: interregional interactions in the Peruvian South-central Highlands*, Ph.D. Dissertation, Department of Anthropology, Yale University.

2010b “El manejo del espacio ritual en el sitio de Sajara-patac y sus implicancias para el «fenómeno Chavín»,” *Boletín de Arqueología PUCP* 13: 133-158.

2012 “Recognizing ritual: the case of Campanayuc Rumi,” *Antiquity* 86: 746-759.

Matsumoto, Yuichi and Yuri Caveró Palomino

2010 “Una aproximación cronológica del centro ceremonial de Campanayuc Rumi, Ayacucho,” *Boletín de Arqueología PUCP* 13: 323-346.

2012 “Early Horizon Gold Metallurgy from Campanayuc Rumi,” *Ñawpa Pacha: A Journal of Andean Archaeology* 32-1: 115-130.

Matsumoto, Yuichi and Eisei Tsurumi

2010 “Archeological investigations at Sajara-patac in the Upper Huallaga Basin, Peru,” *Ñawpa Pacha: A Journal of Andean Archaeology* 31-2: 55-110.

McNiven, Ian J.

2012 “Ritualized middening practice,” *Journal of Archaeological Method and Theory* (Online-first, March 2012), pp. 1-36.

McOmish, David

1996 “East Chisenbury: ritual and rubbish at the British Bronze Age–Iron Age transition,” *Antiquity* 70: 68-76.

Mesia, Christian

2007 *Intrasite spatial organization at Chavín de Huántar during the Andean*

*Formative: three dimensional modeling, stratigraphy and ceramics*, Ph.D. Dissertation, Stanford University. Ann Arbor: University Microfilms.

Meskill, Lynn

2002 “Negative heritage and past mastering in archaeology,” *Anthropological Quarterly* 75-3: 557-574.

Meskill, Lynn (ed.)

2005 *Archaeologies of Materiality*, Oxford: Blackwell.

Miller, Daniel (ed.)

2005 *Materiality*, Durham: Duke University Press.

Miller, George R.

1979 *An introduction to the Ethnoarchaeology of the Andean Camelids*. Ph.D. Dissertation, University of California, Berkeley, Ann Arbor: University Microfilms.

2003 “Food for the dead, tools for the afterlife: zooarchaeology at Machu Picchu,” In Burger, R.L. & L. Salazar-Burger (eds.), *The 1912 Yale Peruvian Scientific Expedition Collections from Machu Picchu: Human and Animal Remains*, pp.1-63. New Haven: Yale University Publications in Anthropology.

Mills, Barbara J. and William H. Walker (eds.)

2008 *Memory Work: Archaeologies of Material Practices*, Santa Fe: School for Advanced Research Press.

溝口孝司

2004 「ポストプロセス考古学」、安斎正人編『現代考古学辞典縮刷版』、pp. 401-404、同成社。

Moore, James A., and Arthur S. Keene (eds.)

1983 *Archaeological Hammers and Theories*, New York: Academic Press.

Moore, Jerry D.

1996 *Architecture and Power in the Ancient Andes: The Archaeology of Public Buildings*, Cambridge: Cambridge University Press.

Needham, Stuart and Tony Spence

1997 “Refuse and the formation of middens,” *Antiquity* 71: 77-90.

Onuki, Yoshio (大貫良夫)

1993 “Las actividades ceremoniales tempranas en la Cuenca del Alto Huallaga y algunos problemas generales,” In Millones, L. & Y. Onuki (eds.), *El Mundo Ceremonial Andino* (Senri Ethnological Studies 37), pp.69-96, Osaka: National Museum of Ethnology.

1997 “Ocho tumbas especiales de Kuntur Wasi,” *Boletín de Arqueología PUCP* 1:79-114.

1998 「第一章 交差した手の神殿」、加藤泰健・関雄二編『文明の創造力ー古代アンデスの神殿と社会ー』、pp. 43-94、角川書店。

- 2010 「第一章アンデス文明形成期研究の50年」、大貫良夫・加藤泰建・関雄二編『古代アンデス 神殿から始まる文明』、pp.55-103、朝日新聞出版。
- Onuki, Yoshio and Kinya Inokuchi
- 2011 *Gemelos Prístinos: El Torsoro del Templo de Kuntur Wasi*, Lima: Fondo Editorial del Congreso del Perú, Minera Yanacocha.
- 大貫良夫・加藤泰建・関雄二編
- 2010 『古代アンデス 神殿から始まる文明』、朝日新聞出版。
- Pauketat, Timothy R.
- 2001 “Practice and history in archaeology: an emerging paradigm,” *Anthropological Theory* 1: 73-98.
- 2007 *Chiefdoms and Other Archaeological Delusions*, Lanham: Alta Mira Press.
- Pauketat, Timothy R., Lucretia S. Kelly, Gayle J. Fritz, Neal H. Lopinot, Scott Eliasand, and Eve Hargrave
- 2002 “The Residues of Feasting and Public Ritual at Early Cahokia,” *American Antiquity* 67-2: 257-279.
- Pollard, Joshua
- 2008 “Deposition and material agency in the early Neolithic of southern Britain,” In Mills, B. J. & W. H. Walker (eds.), *Memory Work: Archaeologies of Material Practices*, pp. 41-59, Santé Fe: School of Advanced Research Press.
- Pozorski, Shelia, and Thomas Pozorski
- 1987 *Early Settlement and Subsistence in the Casma Valley, Peru*, Iowa City: University of Iowa Press.
- Rathje, William L.
- 1974 “The garbage project: a new way of looking at the problems of archaeology,” *Archaeology* 27: 236-241.
- 1978 “Modern material culture studies,” In Schiffer, M. B. (ed.), *Advances in Archaeological Method and Theory*, Volume 1, pp.1-38, New York: Academic Press.
- Reid Jefferson J., Michael B. Schiffer, and William L. Rathje
- 1975 “Behavioral archaeology: four strategies,” *American Anthropologist* 77: 864-869.
- Renfrew, Colin
- 1985 *The Archaeology of Cult: The Sanctuary at Phylakopi*, London: Thames and Hudson.
- 1994 “The archaeology of religion,” In Renfrew, C. & E. Zubrow (eds.), *The Ancient Mind*, pp.47-54, Cambridge: Cambridge University Press.
- Renfrew, Colin and Paul Bahn
- 2004 (2007) *Archaeology: Theories, Methods, and Practice*, London: Thames and Hudson. (『考古学: 理論・方法・実践』、池田祐 他訳、東洋書林。)
- Renfrew, Colin and Ezra W. Zubrow (eds.)

1994 *The Ancient Mind*, Cambridge: Cambridge University Press.

Rick, John W.

2006 “Chavín de Huántar: evidence for an evolved shamanism,” In Sharon, D. (ed.), *Mesas and Cosmologies in the Central Andes* (San Diego Museum Papers 44), pp. 101-112, San Diego: San Diego Museum of Man.

2008 “Context, construction, and ritual in the development of authority at Chavín de Huántar,” In Conklin, W. & J. Quilter (eds.), *Chavín: Art, Architecture and Culture* (Cotsen Institute Monograph 61), pp.3-34, Los Angeles: Cotsen Institute of Archaeology, University of California.

Roe, Peter G.

2008 “How to build a raptor: Why the Dumbarton Oaks “Scaled Cayman” Callango Textile is really a jaguaroid harpy eagle,” In Conklin, W. & J. Quilter (eds.), *Chavín: Art, Architecture and Culture* (Cotsen Institute Monograph 61), pp.181-236, Los Angeles: Cotsen Institute of Archaeology, University of California.

ロストウォロフスキ, マリア

2003 『インカ国家の形成と崩壊』増田 義郎訳、東洋書林。

Salazar, Lucy C.

2009 “Escaleras al cielo: altares y ancestros en el sitio arqueológico de Cardal,” In Burger, R. L. & K. Makowski (eds.), *Arqueología del Periodo Formativo en la Cuenca Baja de Lurín*, pp.83-94, Lima: Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú.

Schiffer, Michael B.

1972 “Archaeological context and systemic context,” *American Antiquity* 37: 156-165.

1991 *The Portable Radio in American Life*, Tucson: University of Arizona Press.

1994 *Taking Charge: The Electric Automobile in America*, Washington D.C.: Smithsonian Institution Press.

Seki, Yuji (関雄二)

1998a 「第四章 形成期神殿の終焉」、加藤泰建・関雄二編『文明の創造力』、pp. 225-266、角川書店。

1998b 「第六章 文明の創造力」、加藤泰建・関雄二編『文明の創造力』、pp. 297-311、角川書店。

2010 「序章 古代アンデス文明とは何か」、大貫良夫・加藤泰建・関雄二編『古代アンデス 神殿から始まる文明』、pp. 9-54、朝日新聞出版。

Seki, Yuji, Juan Pablo Villanueva, Masato Sakai, Diana Alemán, Mauro Ordóñez, Walter Tosso, Araceli Espinoza, Kinya Inokuchi and Daniel Morales

2010 “Nuevas evidencias del sitio arqueológico de Pacopampa, en la sierra norte del Perú,” *Boletín de Arqueología PUCP* 12:69-95.

- Shanks, Michael and Christopher Tilley  
1992 *Re-constructing Archaeology*, 2nd Edition, London: Routledge.
- Silverman, Helaine  
1994 “The archaeological identification of an ancient Peruvian pilgrimage center,”  
*World Archaeology* 26-1: 1-18.
- Skibo, James M., William H. Walker, and Axel E. Nielsen (eds.)  
1995 *Expanding Archaeology*, Salt Lake City: University of Utah Press.
- Thomas, Julien  
1999 *Understanding the Neolithic*, 2nd Edition, London: Routledge.
- Van Dyke, Ruth M., and Susan E. Alcock (eds.)  
2003 *Archaeologies of Memory*, Blackwell: Oxford.
- Torres Manuel  
2008 “Chavín’s Psychoactive Pharmacopoeia: the iconographic evidence,” In Conklin,  
W. & J. Quilter (eds.), *Chavín: Art, Architecture and Culture* (Cotsen Institute  
Monograph 61), pp.239-259, Los Angeles: Cotsen Institute of Archaeology,  
University of California.
- Vasquez, Victor F. and Terasa R. Tham  
n.d.a Zooarqueología del sitio Campanayuc Rumi, Vilcashuaman, Ayacucho, Report  
prepared for Campanayuc Rumi archaeological project, Trujillo.  
n.d.b Análisis microscópico de granos de almidón de Sajara-patac, Huánuco.  
Unpublished report prepared for the Huánuco Archaeological Project.
- Vega-Centeno, Rafael S.  
2007 “Construction, labor organization, and feasting during the Late Archaic Period  
in the Central Andes,” *Journal of Anthropological Archaeology* 26: 150-171.
- Walker, William H.  
1995a *Ritual prehistory: a Pueblo case study*, Ph.D. Dissertation, Department of  
Anthropology, University of Arizona, Ann Arbor: University Microfilms.  
1995b “Ceremonial trash?” In Skibo, J. M., W.H. Walker, & A.E. Nielsen (eds.),  
*Expanding Archaeology*, pp.67-79, Salt Lake City: University of Utah Press.  
1998 “Where are the witches of prehistory?,” *Journal of Archaeological Method  
Theory* 5:245-308.  
2002 “Stratigraphy and practical reason,” *American Anthropologist* 104:159-77.  
2008 “Practice and nonhuman social actors,” In Mills, B. J. & W. H. Walker (eds.),  
*Memory Work: Archaeologies of Material Practices*, pp.137-157. Santa Fe:  
School for Advanced Research Press.
- Walker, William H. and Lisa J. Lucero  
2000 “The depositional history of ritual and power,” In Dobres, M. & J. Robb (eds.),  
*Agency in Archaeology*, pp.130-147. London: Routledge.
- Walker, William H., James M. Skibo, and Axel E. Nielsen

- 1995 "Introduction: expanding archaeology," In Skibo, J. M., W. H. Walker, & A. E. Nielsen (eds.), *Expanding Archaeology*, pp.1-12. Salt Lake City: University of Utah Press.

Wheeler, Julien C.

- 1984 "On the origin and early development of the camelid pastoralism in the central Andes," In Clutton-Brock, J. & C. Grigson (eds.), *Animals and Archaeology: Early Herders and Their Flocks*, Volume 3, pp.395-410, Oxford: BAR International Series.

Yoffee, Norman

- 2005 *Myths of the Archaic State: Evolution of the Earliest Cities, States, and Civilizations*, Cambridge: Cambridge University Press.

図版



図1 本論で扱う神殿遺跡

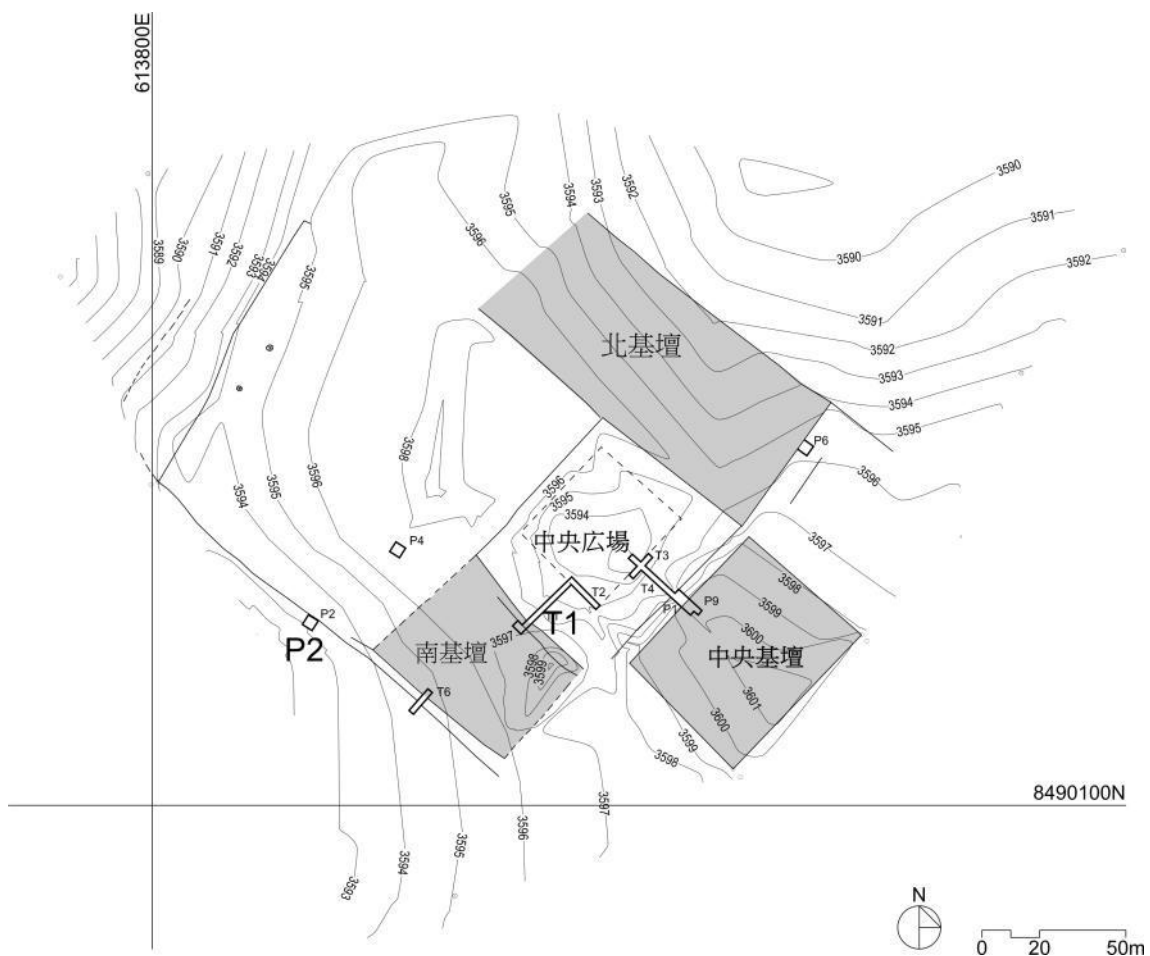


図2 カンパナユック・ルミ神殿平面図



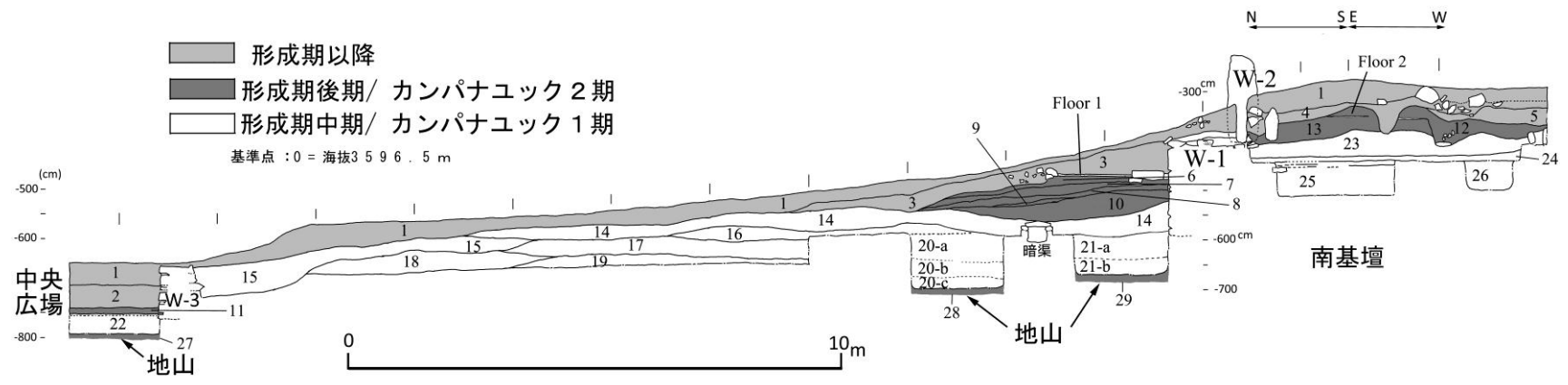


図3 T1 土層断面図



図4 破壊された暗渠



図5 P2 発掘区

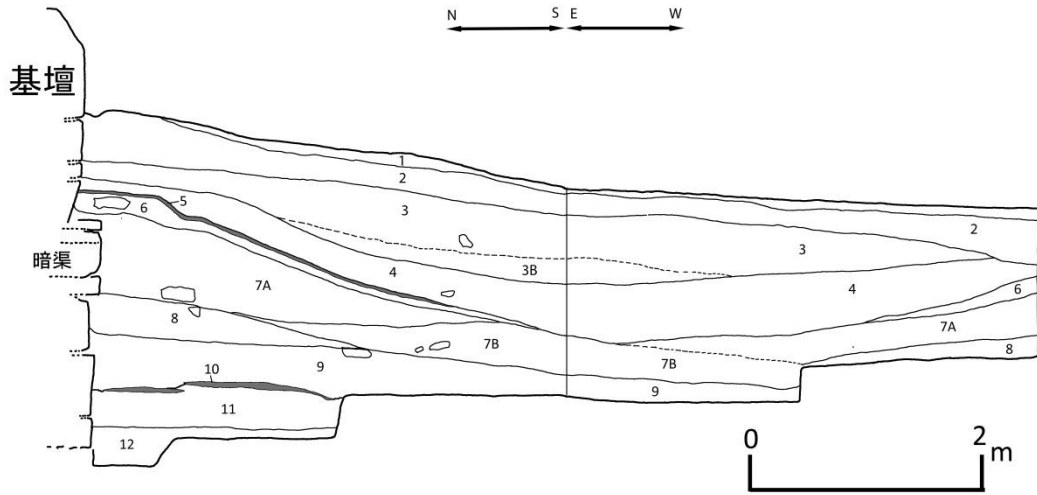


図6 P2 土層断面図

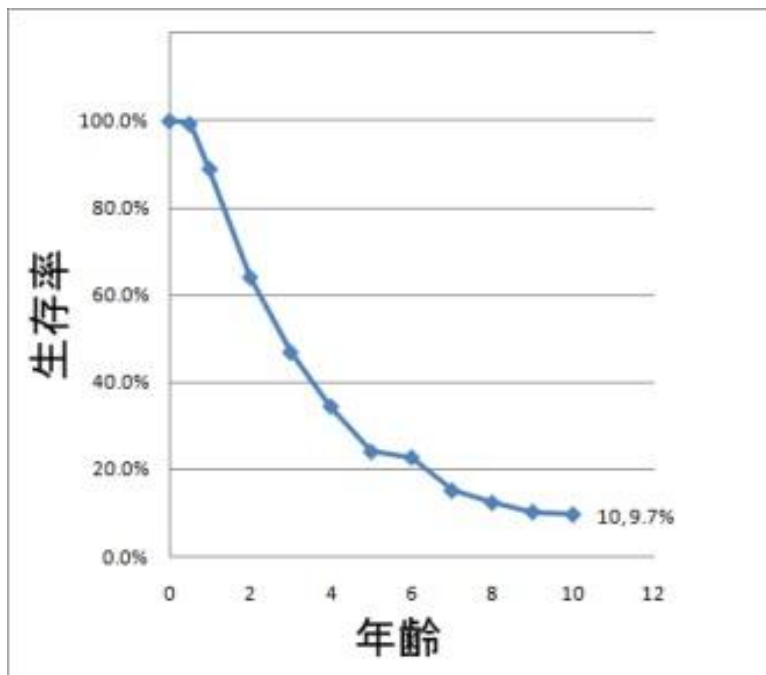


図7 P2 出土ラクダ科動物の年齢別生存率



图8 P2 出土土器



图9 P2 出土骨角器

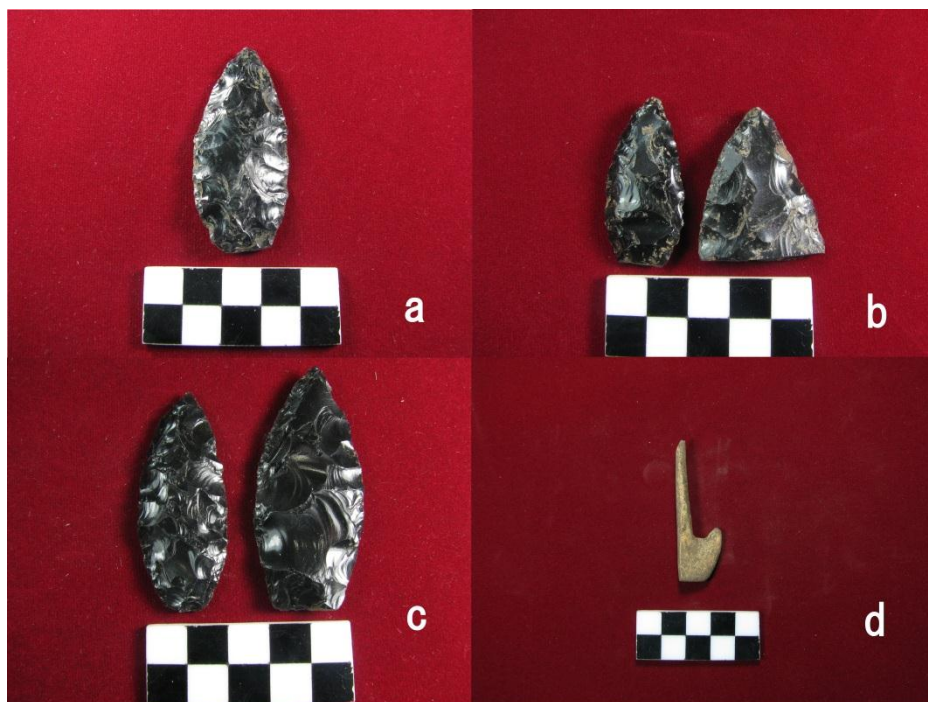


図 10 P2 出土、黒曜石製尖頭器(a-c)と投槍器(d)

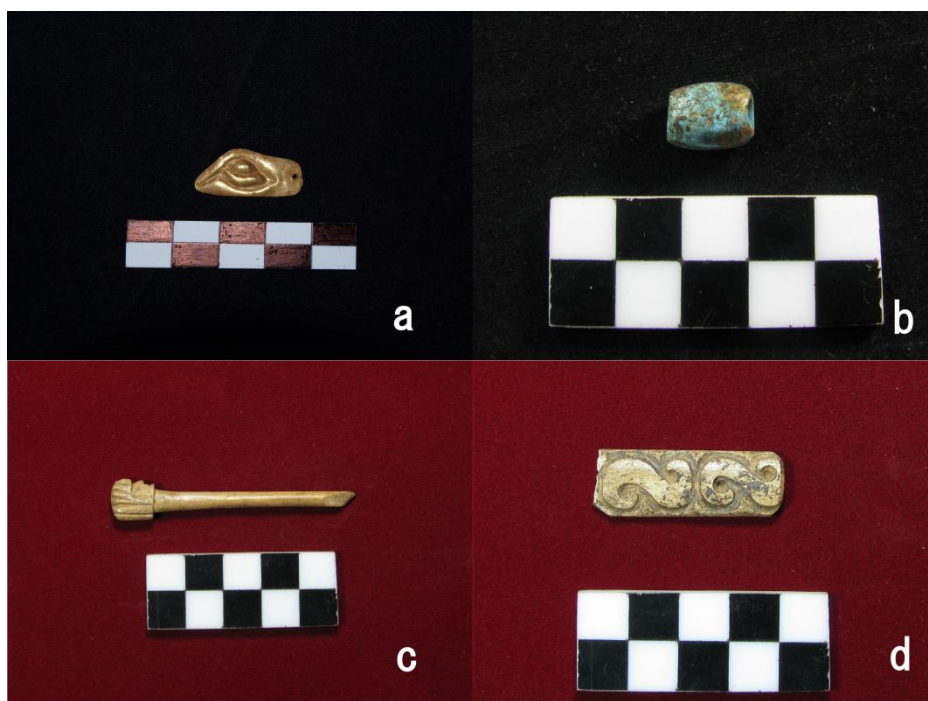


図 11 P2 出土遺物。金製品(a)、石製ビーズ(b)、チャビン・デ・ワントルの図像を伴う骨製品(c-d)

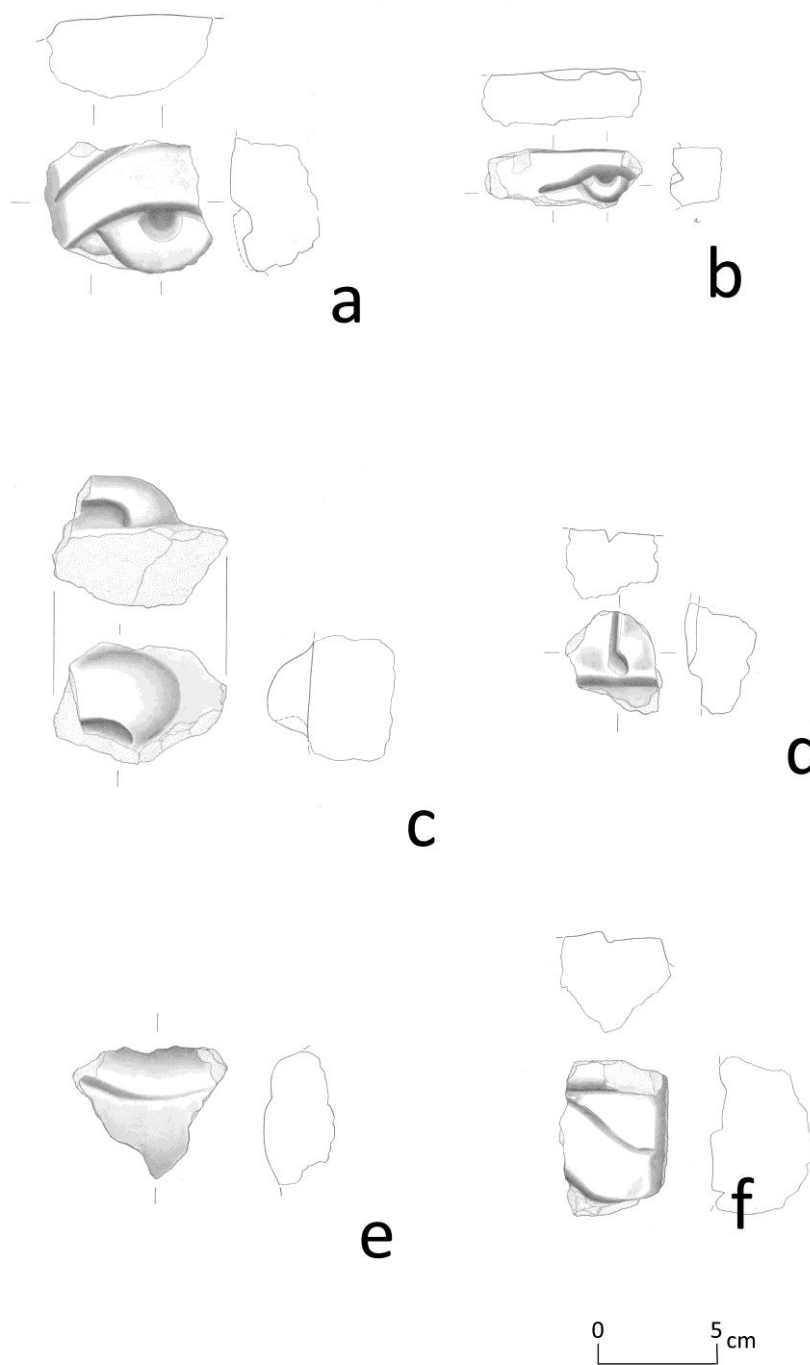


図 12 P2 出土土製レリーフ

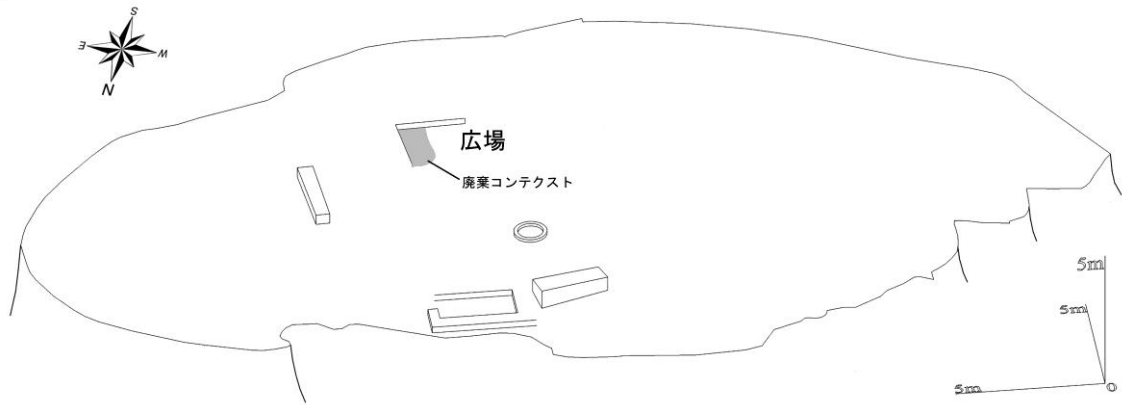


図13 サハラバタク神殿、最初の建築と廃棄コンテキストの位置



図14 サハラバタク神殿、最初の建築に伴う廃棄コンテキスト

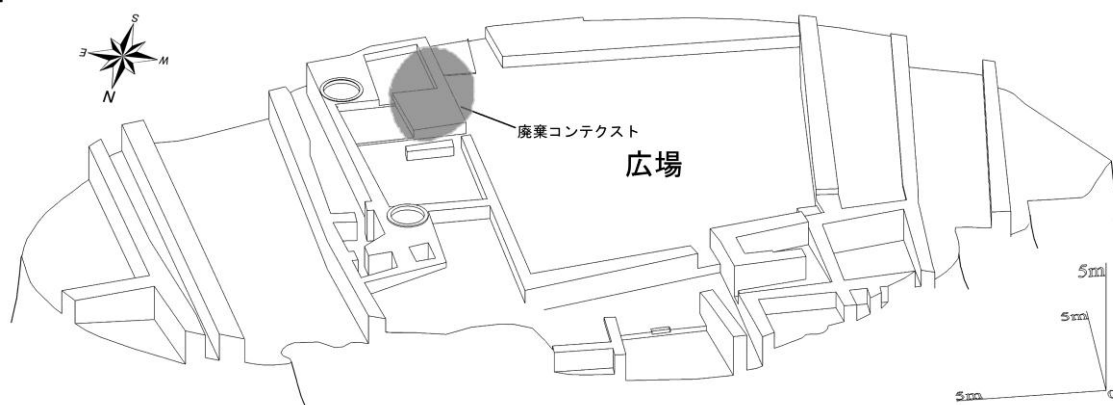


図 15 サハラパタク神殿、2 時期目の建築と廃棄コンテキストの位置

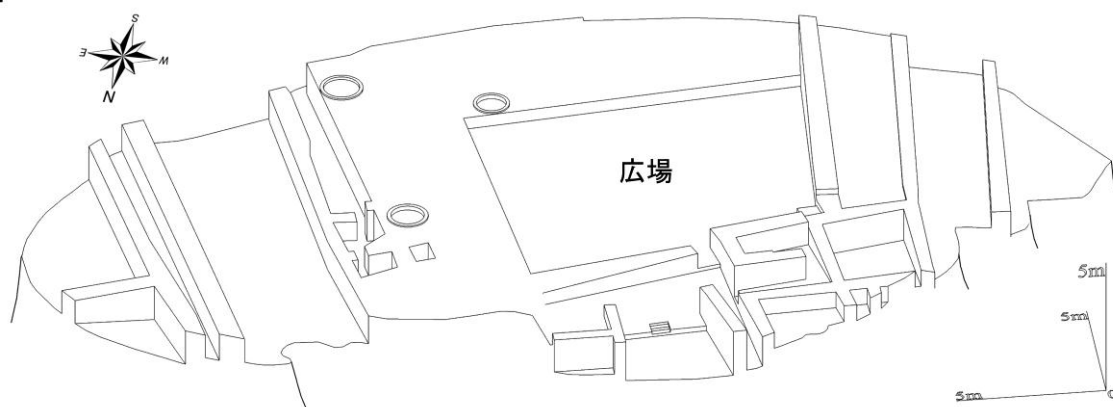


図 16 サハラパタク神殿、3 時期目の建築



## Ritual and Discard in Ceremonial Centers: The Case of Andean Formative

Yuichi Matsumoto

This article examines ritual behaviors carried out at the ceremonial centers of the Andean Formative (3000-50 B.C.) by using behavioral archaeology and practice-agency theory as theoretical frameworks. For this purpose, the focus is placed on the overall contexts of the deposits and middens found in ceremonial centers. The site formation processes of each context are considered through applications of recent studies on ritual deposition presented by William Walker. From the overall contexts of the deposits found at these centers, they include ritual paraphernalia such as snuffing spoons for ingesting hallucinogens which were recovered along with food refuse of communal feasting activities. Through the examination of the life histories of the ritual objects, it becomes clear that once ritual paraphernalia have been used in ritual activities, they become ritually charged objects, and thus, cannot be used in the context of daily life any more. This process generates a unique type of archaeological deposits which Walker named as “ceremonial trash”. My research shows that this category is useful in understanding the contexts of many of the deposits from the Andean Formative period. An interpretation of these contexts through practice-agency theory points out that repeated ritual and disposal activities connect social groups to ceremonial centers and rituals carried out at the centers, and that this process could have been a mechanism to maintain social memories.

### **Key Words**

Andean Formative, behavioral archaeology, practice theory, ritual, discard